

山梨県韋崎市

# 上本田遺跡

県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1992

韋崎市教育委員会  
峡北土地改良事務所

山梨県韋崎市

# 上本田遺跡

県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1992

韋崎市教育委員会  
峡北土地改良事務所

## 序 文

姫崎市では、藤井平において近年県営圃場整備事業等の大規模開発とともに、数多くの遺跡が発掘調査され貴重な文化財が発見されています。この度発刊された本報告書は、そのような貴重な発見が相次ぐ大規模開発の一端として、平成3年度県営圃場整備事業に伴い発掘調査された、上本田遺跡の報告であります。

上本田遺跡からは、縄文時代の住居址と平安時代の住居址などの遺構が発見され、土器や石器、土師器・須恵器や鉄器といった遺物が採取されました。遺跡から出土したこれらの遺物は当時の生活用品が主体となっており、大切な資料を得ることができました。これらの資料を文化財として、永く後世に伝えて行くべく本報告書が作成されました。本書が我々の先人の生活と歴史をときあかすための手助けになればと願っております。

最後に、遺跡の発掘調査並びに報告書作成に伴い、多大なる御理解と御協力を賜った関係諸機関及び関係者の皆様方に深く感謝を申し上げます。

平成4年3月31日

姫崎市教育委員会

教育長 功刀幸丸

## 例　　言

- 1 本書は、県営圃場整備事業に伴う上本田遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、岐北土地改良事務所負担金、文化庁・山梨県の補助金を受け、韮崎市教育委員会が実施した。
- 3 本報告書の作成並びに整理作業は、韮崎市教育委員会社会教育課が行い、山下孝司が担当した。
- 4 炭化材の同定は、パリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。
- 5 凡　例
  - ① 遺構の番号は発掘調査現場において付けたものである。
  - ② 縮尺は各挿図ごとに示した。挿図中のドットは焼土をあらわす。
  - ③ 遺構断面図の水糸標高（m）は数字で示した。
  - ④ 挿図断面図のは石をあらわす。
  - ⑤ 歴史時代土器断面、白ぬきは土師器、黒は須恵器をあらわす。
  - ⑥ 写真図版中遺物に付けられた番号は、実測図の番号と対応する。
- 6 発掘調査及び報告書作成に当たり、多くの方々から御指導・御協力をいただいた。一々御芳名を上げることは割愛させていただくが、厚く御礼を申し上げる次第である。
- 7 発掘調査、整理によって出土並びに作成された遺物及び資料は、韮崎市教育委員会において保管している。

### 調　　査　組　織

- 1 調査主体　韮崎市教育委員会
- 2 調査担当　山下孝司（韮崎市教育委員会社会教育課）
- 3 調査参加者  
岡本嘉一・小田切耕江・小沢高恵・小沢千代子・小沢治代・岡本保枝・長島昌子・古沢文子・志村冴子・小沢栄子・五味ゆき子・坂本恒子・深沢真知子・石原ひろみ・小野初美・三井福江・有賀京子
- 4 事　務　局　　韮崎市教育委員会社会教育課  
教育長　功刀幸丸、課長　中島尚武、課長補佐　深沢　卓、係長　横森淳彦、雨宮智子

# 目 次

序 文

例 言

目 次

挿図・表目次

写真図版目次

I	調査に至る経緯と概要 .....	1
II	遺跡の立地と環境 .....	1
1	遺跡の立地 .....	1
2	周辺の遺跡 .....	1
III	遺跡の地相概観 .....	3
IV	調査の方法 .....	3
V	遺 構 .....	6
VI	遺 物 .....	15
VII	蘿崎市上本田遺跡炭化植物遺体の同定 .....	43
VIII	結 び .....	51
	写 真 図 版	

## 挿図・表目次

第1図	上本田遺跡①と周辺の遺跡	2
第2図	上本田遺跡位置図	4
第3図	上本田遺跡全体図	5
第4図	遺構平・断面図（1号住居址・2号住居址）	7
第5図	遺構平・断面図（3号住居址・4号住居址）	8
第6図	遺構平・断面図（5号住居址・6号住居址）	9
第7図	遺構平・断面図（7号住居址・8号住居址）	10
第8図	遺構平・断面図（9号住居址・10号住居址）	11
第9図	遺構平・断面図（11・12号住居址）	13
第10図	遺構平・断面図（1号掘立柱建物址・1号土坑・1号集石土坑）	14
第11図	1号住居址出土遺物	26
第12図	1号住居址出土遺物	27
第13図	2号住居址出土遺物	27
第14図	2号住居址出土遺物	28
第15図	3号住居址出土遺物	28
第16図	4号住居址出土遺物	29
第17図	5号住居址出土遺物	29
第18図	5号住居址出土遺物	30
第19図	6号住居址出土遺物	30
第20図	7号住居址出土遺物	30
第21図	7号住居址出土遺物	31
第22図	8号住居址出土遺物	32
第23図	8号住居址出土遺物	33
第24図	9号住居址出土遺物	34
第25図	9号住居址出土遺物	35
第26図	10号住居址出土遺物	35
第27図	10号住居址出土遺物	36
第28図	10号住居址出土遺物	37
第29図	11号住居址出土遺物	37
第30図	11号住居址出土遺物	38
第31図	11号住居址出土遺物	39
第32図	12号住居址出土遺物	39
第33図	12号住居址出土遺物	40
第34図	1号土坑出土遺物	40
第35図	遺構外出土遺物	41
第36図	遺構外出土遺物	42
第37図	11号住居址出土炭化材試料位置図	47
表 1	11号住居址出土材の樹種（その1）	48
表 2	11号住居址出土材の樹種（その2）	49
表 3	1号・5号・8号・10号住居址出土材の樹種	50
表 4	出土材の樹種と遺構	50

## 写 真 図 版 目 次

- 図版1 遺跡遠景、1号住居址、2号住居址
- 図版2 3号住居址、4号住居址、5号住居址
- 図版3 \* 6号住居址、調査風景、7号住居址
- 図版4 遺跡近景、8号住居址、9号住居址
- 図版5 10号住居址、遺跡近景、作業風景
- 図版6 11号住居址遺物出土状態、測量風景
- 図版7 11号住居址、12号住居址、1号掘立柱建物址、1号土坑
- 図版8 1号集石土坑、遺跡近景
- 図版9 1号住居址出土遺物、2号住居址出土遺物、3号住居址出土遺物、4号住居址出土遺物
- 図版10 5号住居址出土遺物、7号住居址出土遺物、8号住居址出土遺物
- 図版11 9号住居址出土遺物、10号住居址出土遺物、11号住居址出土遺物
- 図版12 11号住居址出土遺物、12号住居址出土遺物、1号土坑出土遺物、遺構外出土遺物
- 図版13 炭化材の走査型電子顕微鏡写真
- 図版14 炭化材の走査型電子顕微鏡写真
- 図版15 炭化材の走査型電子顕微鏡写真

## I 調査に至る経緯と概要

平成3年度県営圃場整備事業実施にともない、本市教育委員会では韮崎市圃場整備室から依頼を受け、事業予定地区を平成2年度に踏査及び試掘を行い、遺跡の存在を確認した。その結果をもとに、岐北土地改良事務所・山梨県教育庁文化課・市教育委員会で協議を行い、遺跡名を上本田遺跡として、圃場整備事業に先立って延面積約2700m<sup>2</sup>を対象として発掘調査を行い、記録に留め永く後世に伝えることとした。

発掘調査は、平成3年8月より開始し11月半ばに終了した。引き続き、遺物等の整理作業を行い、報告書作成までの作業が完了したのは、平成3年3月であった。

## II 遺跡の立地と環境

### 1 遺跡の立地

上本田遺跡は、山梨県韮崎市穴山町久保字上本田地内に所在した。

韮崎市は、山梨県の北西部に位置し、甲府盆地の北西端を占めている。市内を貫流する釜無川・塩川により、地形的には山地・台地・平地の三地域に分けられる。

上本田遺跡の所在した塩川右岸の河岸段丘上は、塩川の侵食によって造られた茅ヶ岳山麓の断崖と、七里岩台地東側の片山とに挟まれた低地性の平地となっている。この平地は通称藤井平と呼ばれ、地内を貢流する黒沢川・藤井堰により水利がよく、肥沃で豊かな水田地帯が広がっている。また『甲斐国志』には「穴山ヨリ南小田川、駒井、坂井、中條、下條、韮崎等ノ數村ヲ里入藤井ノ庄五千石ト云」と記載があり、古くから穀倉地帯であったことが窺える。当該地帯は一見平坦地の様相を呈してはいるが、地形を観察してみると、度重なる氾濫によって自然堤防状の微高地が所々に発達していることがわかる。藤井平は、このような微高地上に遺跡が点在しており、上本田遺跡は標高約460mの水田下に発見された。

### 2 周辺の遺跡

番号	遺跡名	時代区分	備考
①	上 本 田	縄文・平安	平成3年度 韮崎市教育委員会調査
②	中 本 田	縄文	昭和61年度 韮崎市教育委員会調査
③	中 道	縄文・平安	昭和60年度 韮崎市教育委員会調査
④	下 木 戸	平安	
⑤	中 田 小 学 校	縄文・弥生・奈良・平安	昭和59年度 韮崎市教育委員会調査



第1図 上本田遺跡①と周辺の遺跡 (1 : 50,000)

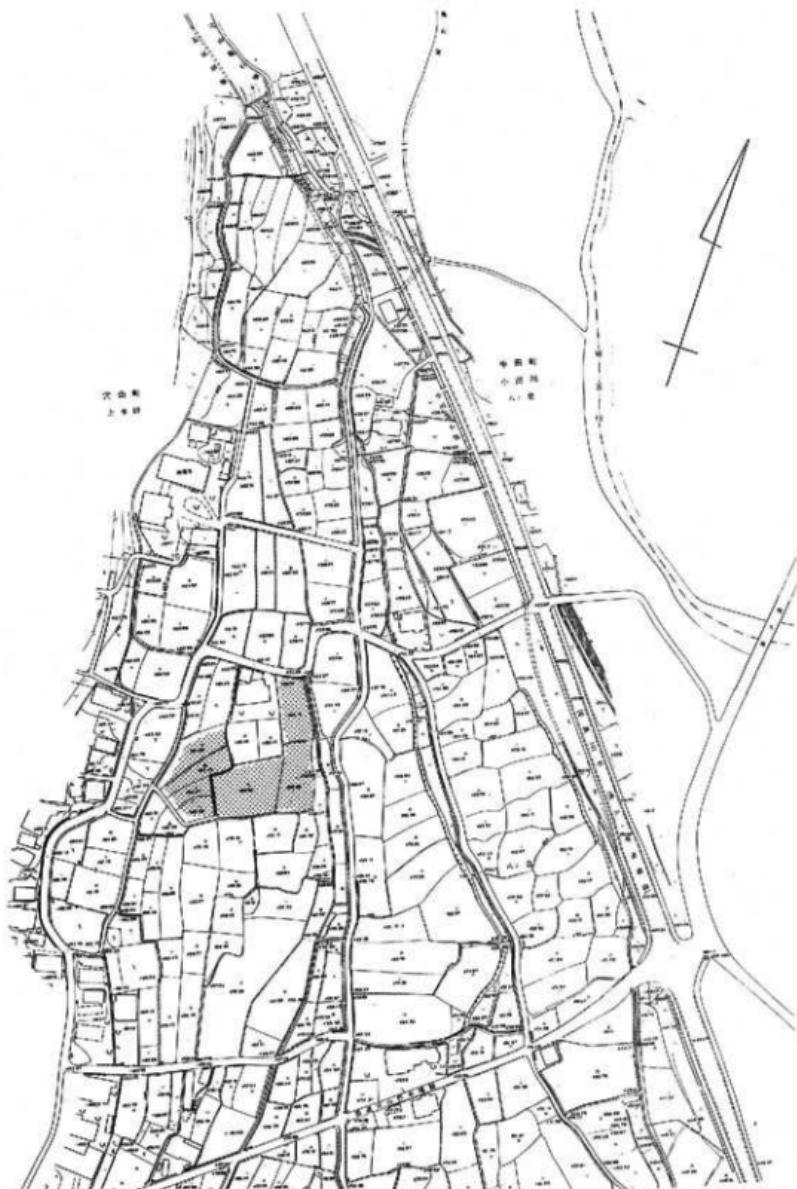
番号	遺 跡 名	時 代 区 分	備 考
⑥	金 山	中世～近世	昭和60年度 垂崎市教育委員会調査
⑦	前 田	平安	昭和62年度 垂崎市教育委員会調査
⑧	宮ノ前第2	奈良・平安・中世	平成2年度 垂崎市教育委員会調査
⑨	宮 ノ 前	縄文・弥生・奈良・平安	平成元年～平成2年 垂崎市遺跡調査会調査
⑩	北 後 田	縄文・平安	平成元年度 垂崎市教育委員会調査
⑪	後 田	縄文・弥生・古墳・奈良・平安	昭和63年度 垂崎市教育委員会調査
⑫	堂 の 前	弥生・奈良・平安	昭和61年度 垂崎市教育委員会調査
⑬	北 堂 地	縄文・平安・中世・近世	平成2年度 垂崎市教育委員会調査
⑭	堂 地	縄文・平安・明治	平成3年度 垂崎市教育委員会調査
⑮	普 門 寺	平安・中世	昭和61年度 明野村教育委員会調査
⑯	大 豆 生 田	縄文・弥生・平安	昭和49年度 山梨県教育委員会調査
⑰	大 小 久 保	平安	昭和57年度 須玉町教育委員会調査
⑲	湯 沢	平安	昭和58年度 高根町教育委員会調査
⑳	能 見 城	中世城郭	
㉑	新 府 城 跡	中世城郭	国指定史跡

### III 遺跡の地相概観

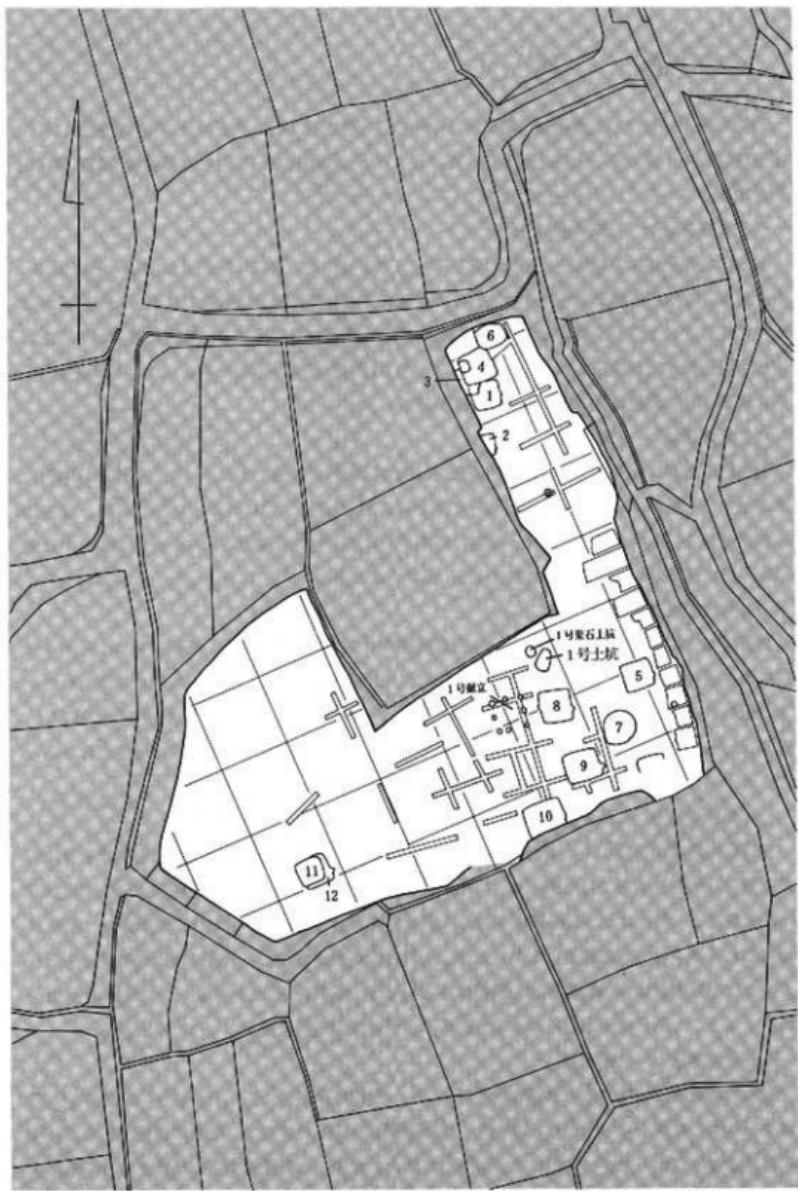
上本田遺跡は、満福寺から150m程南東側の、南・東に緩やかな傾斜をもつ日当りの良い段丘地で、西側に久保の集落が形成されている。遺跡東側の段丘崖下には、穴山龜石堰が南流している。調査区域内において土層を観察すると、耕作土・水田底土の下は、暗黄褐色土～褐色系土・暗褐色土等が堆積しており、遺構はこれらの土層中に掘り込まれていた。

### IV 調査の方法

地形を考慮し任意に10m方眼を設定し調査を行った。耕作土・表土を排除した後、鋤籜等により精査を行い、遺構確認の後、掘り下げを行った。遺物は出るが遺構の確認困難な箇所は適宜にトレンチを設定し掘り下げを行い調査を実施した。



第2図 上本田遺跡位置図 (1:3,000)



第3図 上本田遺跡全体図 (1:800)

## V 遺構

調査の結果発見された遺構は、縄文時代中期の竪穴住居址1軒、平安時代の竪穴住居址11軒、掘立柱建物址1棟の外、土坑2基となっている。以下、現場において付けた遺構番号順に竪穴住居址からみていく。

### <1号住居址> (第4図)

調査区域の北端に位置する。平面形態は隅円方形を呈する。規模は東西4m前後、南北約3.9mを測る。壁は北西側が3号・4号住居址と重複しておりその部分は明瞭でなかったが、ほかはやや外傾し立ち上がり、壁高は5~20cm前後を測る。床面はほぼ平坦で、壁際に周溝がめぐる。床面中央西側に穴が検出されたが、一つだけであり柱穴かどうか不詳である。カマドは東壁南半部に構築され、規模は長さ約1m、幅90cmを測る。

### <2号住居址> (第4図)

調査区域北側に位置する。遺構の西側部分は調査区域外で完掘できなかった。平面形は隅円方形を呈すると思われる。規模は検出部分で南北約3.3mを測る。壁は外傾し立ち上がり、高さ20cm前後を測る。床面はほぼ平坦で、壁際に周溝がめぐる。柱穴は確認されなかった。カマドは東壁南半部に構築され、規模は長さ約1.1m、幅約1mを測る。

### <3号住居址> (第5図)

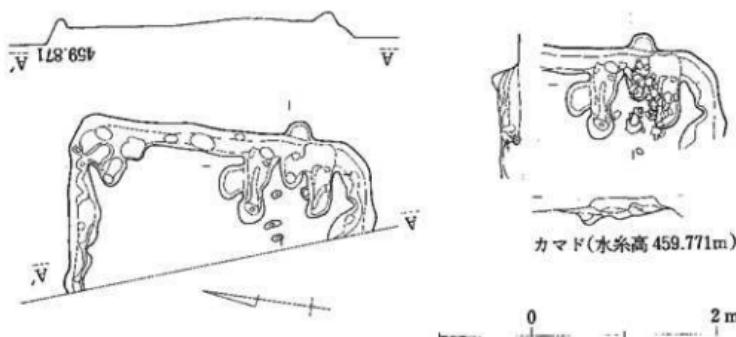
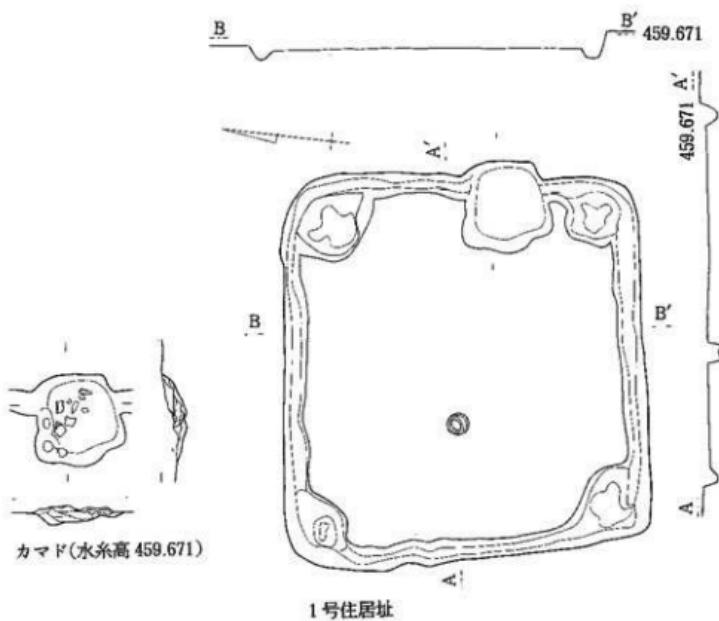
調査区域北端に位置する。西側部分は調査区域外で完掘できなかった。東側部分は1号・4号住居址と重複しており明瞭でなかったが、1号住居址の上に構築され、4号住居址に切られていよいと思われる。平面形は隅円方形を呈するのであろうか。規模は遺存部分で南北約4mを測る。壁高は10cm前後を測る。壁はやや外傾して立ち上がる。床面はほぼ平坦。柱穴は確認されなかった。カマドは東壁南半分に構築され、規模は長さ約1.1m、幅約1mを測る。

### <4号住居址> (第5図)

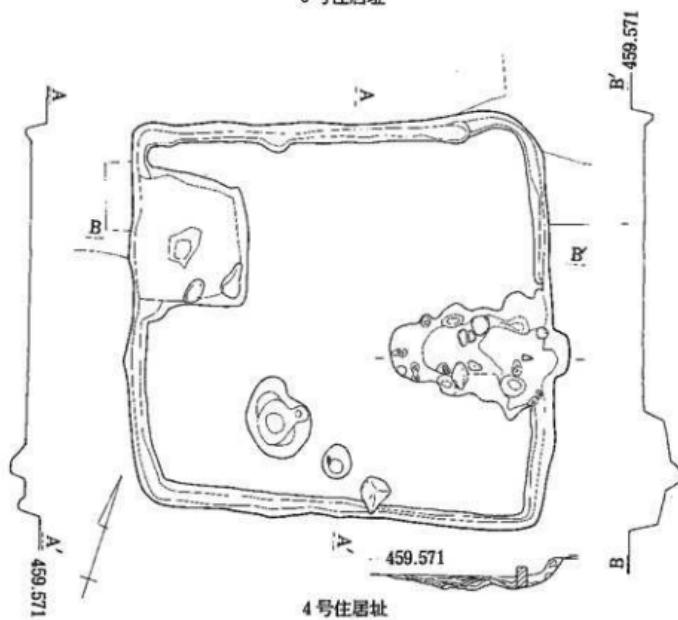
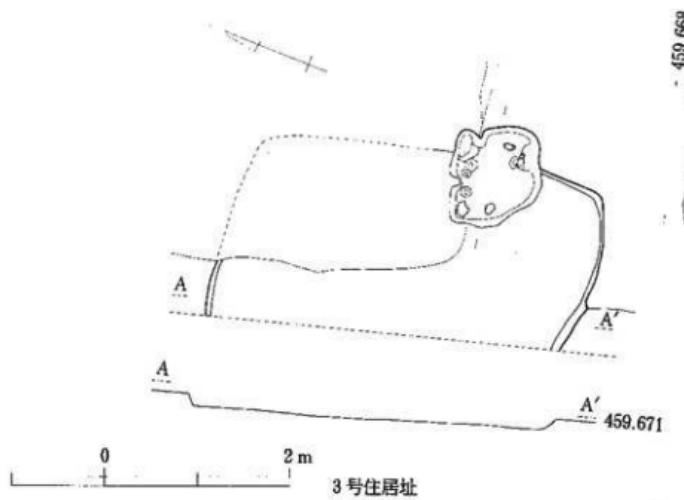
調査区域北端に位置する。南西側は1号・3号住居址と重複しており、また北東隅は6号住居址と重なっており明瞭ではなかった。平面形は隅円方形を呈する。規模は東西約4.5m、南北4.2m前後を測る。壁高は15~20cm前後を測る。壁は外傾し立ち上がる。床面はほぼ平坦で、壁際に周溝がめぐる。柱穴は確認されなかったが、土坑と穴が検出された。土坑は後世の擾乱であろうか。カマドは東壁中央に構築され、規模は長さ約2m、幅1.1m前後を測る。カマド断面土層を観察すると2カ所に焼土が見られることから、住居の拡張乃至重複があったとみられる。

### <5号住居址> (第6図)

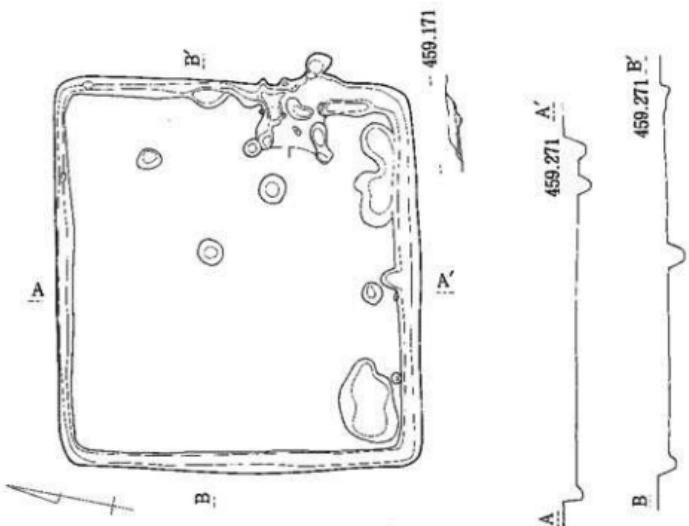
調査区域東端に位置する。平面形は方形を呈し、規模は東西約4.2m、南北約4mを測る。壁はやや外傾しながら立ち上がり、高さ5~15cmを測る。床面は平坦で、壁際に周溝がめぐる。柱穴は確認されなかったが、穴がいくつか検出された。カマドは東壁南半部に構築されるが遺存状態は良好ではなかった。カマド規模は長さ約80cm程度であろう。



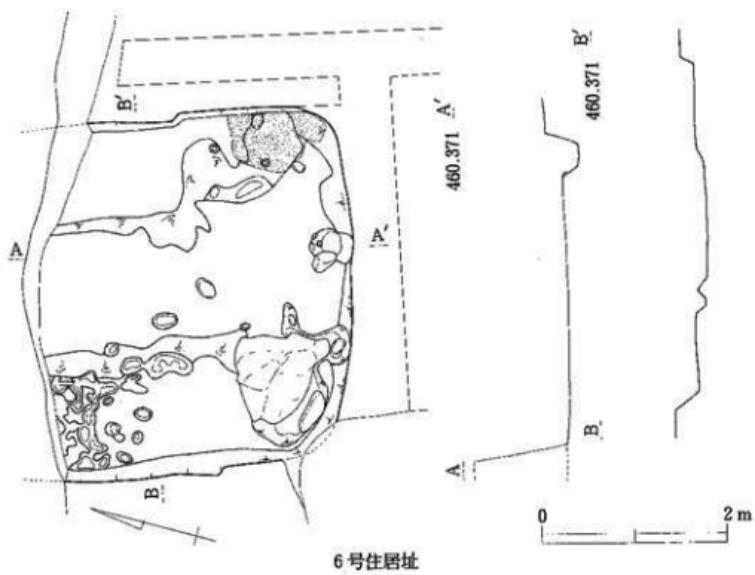
2号住居址



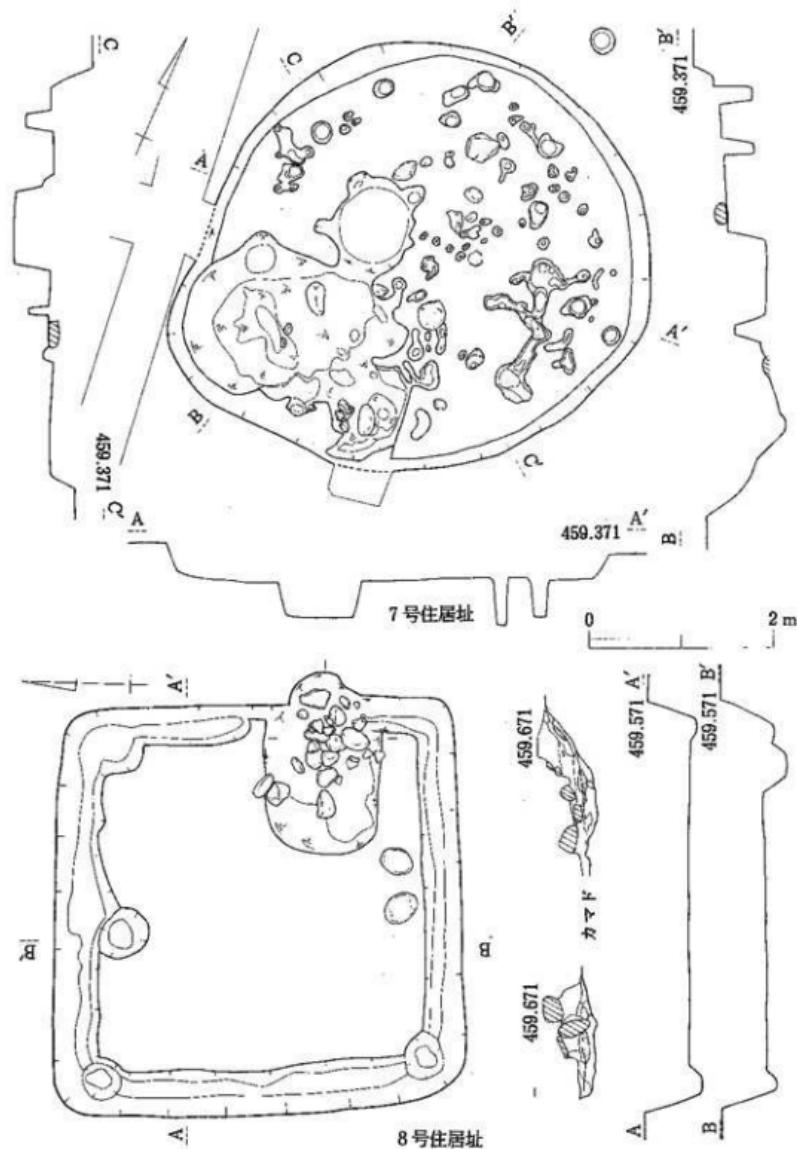
第5図 遺構平・断面図 (1/60)



5号住居址



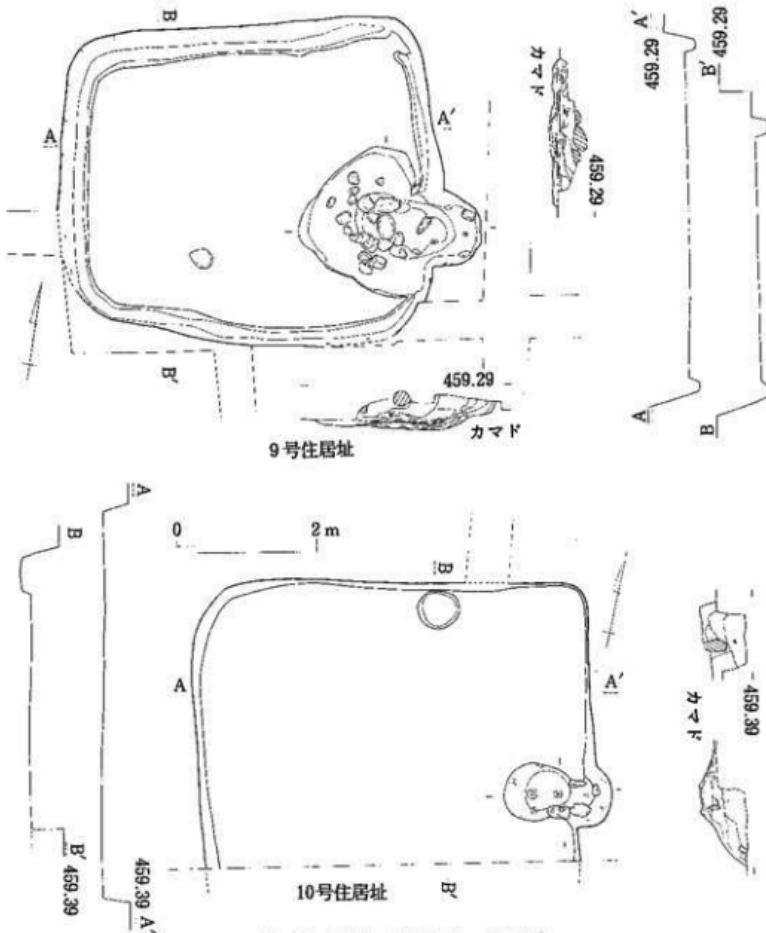
第6図 造構平・断面図 (1/60)



第7図 遺構平・断面図 (1/60)

<6号住居址> (第6図)

調査区域北端に位置する。北側部分は調査区域外で完掘できなかった。南西隅は4号住居址と重複している。検出部分の東西で約3.8mを測る。平面形は隅円長方形であろうか。床面は中央部分が南北方向に一段低くなっている。壁は外傾し、高さ20~25cm前後を測る。柱穴は確認されなかった。周溝はない。南端に穴があった。南西隅に大きな石がある。カマドは確認されなかつたが、南東隅に焼土がみられた。本遺構は住居址としたが、形態が変わっていることから何か特殊な遺構かもしれない。



第8図 遺構平・断面図 (1/80)

#### <7号住居址> (第7図)

調査区域南東側に位置する。本遺跡唯一の縄文時代の住居址である。平面形はほぼ円形を呈する。規模は径4.6m前後を測る。壁は外傾しながら立ち上がり、高さ20~40cm前後を測る。床面はほぼ平坦であるが、小さな穴が数多く確認されており、壁寄りに弧状に連なるものが柱穴であろう。炉は床面中央部から西側の所に作られていたと思われ、円形の穴が検出されている。南西隅には後世の搅乱であろうか、大きな掘り鉢状の穴があった。

#### <8号住居址> (第8図)

調査区域南半部中央東側に位置する。平面形は隅円方形を呈する。規模は東西約4.4m、南北約4.4mを測る。壁は外傾しながら立ち上がる。壁高は45cm前後を測り、深い壁穴となっている。床面は平坦。壁際に周溝がめぐる。柱穴は確認されなかったが、周溝内西側に2カ所と、床面北側に1カ所穴が検出された。カマドは東壁南半部に構築され、規模は長さ約2m、幅約1.3mを測り、石を用いて作られる。

#### <9号住居址> (第8図)

調査区域南東側に位置する。平面形は隅円長方形を呈する。規模は東西約5.3m、南北約4.5mを測る。東辺が西辺に比して広い。壁は外傾しながら立ち上がる。壁高は30~50cm前後を測る。床面は平坦。壁際に周溝がめぐる。柱穴は確認されなかった。カマドは東壁南半部に構築され、規模は長さ約2m、幅約1m程度であろう。

#### <10号住居址> (第8図)

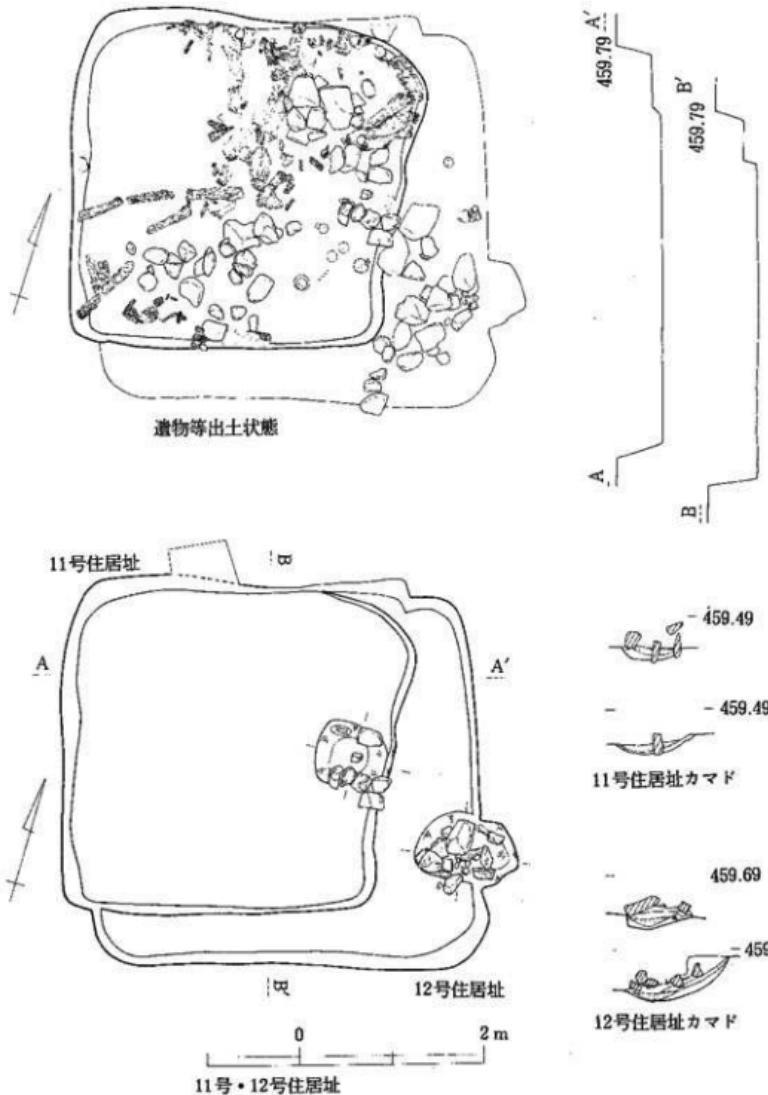
調査区域南端に位置する。南半分は水田の畦で削り取られてしまったようである。平面形は隅円方形であろうか。遺存部分で東西約5.7mを測る。壁は外傾しながら立ち上がり、高さ35cm前後を測る。周溝・柱穴はない。カマドは東壁に構築され、規模は長さ1.6m、幅80cm程で、石を用いて作られる。

#### <11号住居址> (第9図)

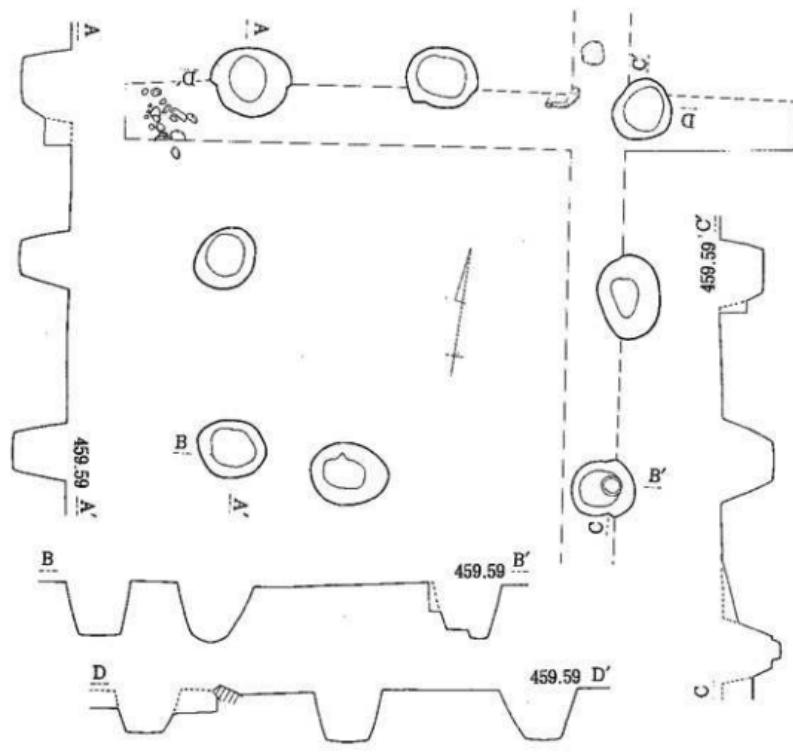
調査区域南半部西側に位置する。12号住居址を切って構築される。平面形は隅円方形を呈する。規模は東西・南北とも3.5m前後を測る。壁は外傾しながら立ち上がり、高さ50cm前後を測るが、12号住居址と重複する部分は明瞭ではなかった。床面は平坦。周溝・柱穴はない。カマドは東壁中央に石を用いて構築される。規模は約長さ80cm、幅60cmを測る。木址は焼失家屋で、角材・板材・丸材等の炭化材が四方から中心に向かうように検出され、カマド南側からは土器等がまとまって発見された。

#### <12号住居址> (第9図)

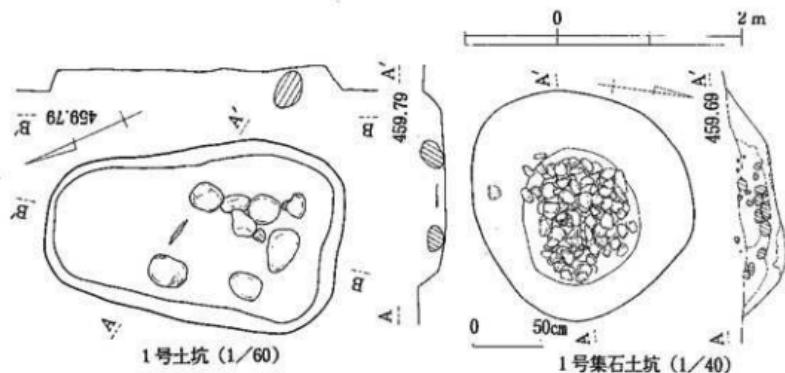
調査区域南半部西側に位置する。大半が11号住居址に切られてしまっている。平面形は隅円方形を呈すると思われる。遺存部分で東西約4.2m、南北約4mを測る。壁は外傾しながら立ち上がり、高さ35cm前後を測る。床面は平坦で、11号住居址との比高10~15cmを測る。周溝・柱穴はない。カマドは東壁南側に、規模長さ約1.1m、幅70cmを測り、石を用いて構築される。



第9図 遺構平・断面図 (1/60)



1号掘立柱建物址 (1/60)



第10図 造構平・断面図

<1号掘立柱建物址> (第10図)

調査区域南半部中央東側に位置する。方形の二間×二間の側柱建物址。柱穴の掘り方は不整の椭円形を呈する。

<1号土坑> (第10図)

調査区域南半部中央東側に位置する。長軸3.2m、短軸2m程で不整の長方形を呈する。壁は外傾し、高さ25cm前後を測る。底面はほぼ平坦。中央から刀が出土しており、何らかの墓壙の可能性がある。

<1号集石坑> (第10図)

調査区域南半部中央東側に位置する。径1.5~1.6mの不整円形を呈する。壁は外傾し立ち上がる。確認面からの深さは25~30cmを測り、底面は平坦ではない。中央に拳大前後の石が多く詰まっていた。

## VI 遺 物

調査の結果出土した遺物は、縄文時代、奈良・平安時代となっている。以下に遺構に伴って出土した遺物を中心に紹介し、一覧表で見ていく。

<1号住居址出土遺物> (第11・12図)

(単位 cm)

番号	種類	器形	法量	胎 土	色調(内面 外顔)	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径			
1	土師器	蓋	-、9.0、-	密 赤白色砂粒 金墨母を含む	橙 色	内面-暗文あり(磨滅により不鮮明) 外面-上部回転ヘラ削り %残
2	土師器	环	3.9、6.0、7.2	密	にぶい黄褐色	体部下半回転ヘラ削り? 破片
3	土師器	环	4.7、11.2、5.5	密	にぶい黄褐色 褐色一部 浅黄褐色	底部回転ヘラ削り %残
4	土師器	环	4.3、10.2、6.0	密 赤色粒子を 含む	橙 色	内面-暗文あり 外面-下部ヘラ削り、底部回転糸 切り後ヘラ削り 口縁一部欠損
5	土師器	环	4.2、10.2、5.4	密	灰褐色 にぶい橙色	内面-放射状暗文 外面-体部下半ヘラ削り、底部回 転糸切り後ヘラ削り %残
6	土師器	环	-、4.0、4.3	白色粒子 砂粒を含む	橙 色 にぶい橙色	内面-暗文あり 外面-体部下半ヘラ削り 底部回転糸切り痕 %残
7	土師器	环	4.3、10.5、5.2	赤・白色粒子 を含む	橙 色	内面-暗文あり 外面-体部下半ヘラ削り、底部回 転糸切り痕 %残
8	土師器	皿	2.7、15.6、6.8	密 赤色粒子を 含む	橙 色 褐色一部 にぶい黄褐色	内面-暗文あり(磨滅により不鮮明) 外面-底部回転ヘラ削り 口縁部%欠損
9	土師器	皿	2.5、15.7、6.0	密 赤色粒子 金墨母を含む	橙 色	外面-底部回転ヘラ削り 口縁部%欠損
10	土師器	土管形 器	鉢底高3.5cm 口徑11cm 46.9、9.6、13.7	砂粒を 多く含む	橙色一部 にぶい橙色	内面-横方向の擦で、挿端部は段 がついて狭くなる、輪積み 痕あり 外面-横方向ヘラ削り、挿端部は 横方向の擦で %残

番号	種類	器形	法量	胎土	色調(内面 外)	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径			
11	土師器	小甕	-, 14.0, -	密 赤・白色粒子 を含む	明赤褐色 にぶい赤褐色	口縁部が媒けている 口縁～胴部破片
12	土師器	甕	-, -, 7.0	金雲母、粗い 砂粒を含む	明褐色 明赤褐色	外面一縦刷毛目 底部に木葉痕あり 底～胴部破片

<2号住居址出土遺物> (第13・14図)

(単位 cm)

番号	種類	器形	法量	胎土	色調(内面 外)	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径			
1	須恵器	蓋	-, 15.1, -	白色砂粒 石英、雲母を 含む	灰色 青灰色	另残
2	須恵器	坏	3.6, 11.9, 7.2	密、白色砂粒 を含む	灰色、一部 にぶい橙色 灰黄色、一部 青灰色	底部回転糸切り痕、刻書あり 另残
3	須恵器	坏	4.1, 11.3, 5.5	白色砂粒 石英を含む	灰白色、一部 にぶい黄褐色	底部回転糸切り痕 另残
4	須恵器	坏	3.9, 11.8, 7.0	白色粒子を 含む	黄灰色 黄色	底部ヘラ切り? 体部墨書きあり 另残
5	須恵器	甕	-, 17.5, -	密、白色砂粒 を含む	灰褐色 灰褐色	口縁部破片
6	須恵器		-, -, -	黑色粒子を 含む	灰色	内面一青海波 外面一印目 破片
7	須恵器	坏	4.0, 13.0, 6.4	白色砂粒を 含む	灰黄色	底部回転糸切り痕 另残
8	土師器	甕	-, -, 9.6	金雲母、砂粒 を含む	赤褐色	内面一刷毛整形の後擦で 外面一縦刷毛目 胴部下半破片
9	土師器	甕	-, 20.1, -	金雲母 砂粒を含む	にぶい赤褐色 赤褐色	内面一横刷毛目 外面一口縁部横刷毛目 胴部縦刷毛目 口縁部～胴部破片
10	土師器	坏	6.1, 16.0, 9.2	赤色粒子を 含む	明赤褐色	内面暗文あり 底部回転糸切り後ヘラ削り、削り 高台? 另残
11	土師器	甕	-, 21.4, -	金雲母 砂粒を含む	にぶい赤褐色 灰赤色	内面一横刷毛整形 外面一縦刷毛整形 另残

<3号住居址出土遺物> (第15図)

(単位 cm)

番号	種類	器形	法量	胎土	色調(内面 外)	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径			
1	土師器	坏	4.1, 10.4, 4.9	密	褐色	内面一暗文あり 另残

<4号住居址出土遺物> (第16図)

(単位 cm)

番号	種類	器形	法量	胎土	色調(内面 外)	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径			
1	須恵器	?	2.2, 3.0, 2.6	白色粒子を 含む	暗灰色	另残

番号	種類	器形	法量 器高・口径・底径		胎土	色調(内面 外顔)	整形・特徴・その他
			器高	口径			
2	土師器	壺	-	16.8.	-	密赤色粒子を含む	内面-暗文あり 口縁部破片
3	土師器	小甕	-	13.6.	-	白色粒子を含む	口縁部-横擦で 破片
4	土師器	小甕	-	13.8.	-	白色粒子を含む	口縁部破片
5	土師器	甕	-	-	9.6	白色粒子を含む	底部-木葉痕
6	土師器	甕	-	30.0.	-	白色粒子を含む	外顔-継刷毛目 内面-磨滅により器面はザラつく 破片
7	土師器	小甕	15.5.	14.0.	7.5	白色粒子を含む 金雲母を含む	外顔-継刷毛目 内面-横刷毛目 底部-木葉痕
8	石器						底部破片

<5号住居址出土遺物> (第17・18図)

(単位 cm)

番号	種類	器形	法量 器高・口径・底径		胎土	色調(内面 外顔)	整形・特徴・その他
			器高	口径			
1	須恵器	蓋	3.8.	14.0.	-	白色粒子を含む	灰白
2	須恵器	高台付环	-	-	8.7	白色粒子を含む	オリーブ灰色 灰色
3	須恵器	甕	-	-	-	白色粒子を含む	灰色
4	土師器	壺	4.4.	10.8.	6.4	密金色に光る 粒子を含む	赤褐色
5	土師器	壺	-	-	6.4	白色粒子を含む 赤色粒子を含む	内面-体部～みこみ部に放射状 暗文 外面-体部下半ヘルア削り凹凸あり 底部-回転糸切り後ヘルア削り 凹凸がみられる 一部欠損
6	繩文 土器	深鉢	-	-	-	白色粒子を含む	みこみ部-暗文 底部-回転糸切り痕 底部破片

<6号住居址出土遺物> (第19図)

(単位 cm)

番号	種類	器形	法量 器高・口径・底径		胎土	色調(内面 外顔)	整形・特徴・その他
			器高	口径			
1	土師器	鉢?	-	-	5.8	金雲母を多く含む	暗オリーブ 褐色 黒褐色
2	土師器	皿	-	-	-	黒色粒子 金雲母を多く含む	内面-暗色 底部黒変
3	鉄器						

<7号住居址出土遺物> (第20・21図)

(単位 cm)

番号	種類	形	法量 器高・口径・底径	胎土	色調(内面 外面)	整形・特徴・その他	
1	繩文器		-,-,15.2	粗い白色粒子 金雲母を含む	明赤褐色 にぶい褐色		底部破片
2	繩文器		-,-,10.4	粗い砂粒 金雲母を 多く含む	暗灰黃 にぶい黃橡		底部破片
3	繩文器			砂粒を含む	褐褐色系	刻目のある粘土紐の浮線文	破片
4	繩文器			砂粒を含む	暗褐色 褐褐色系	粘土紐の浮線文	破片
5	繩文器			金雲母目立つ	黒褐色 褐暗褐色	半截竹管による平行線・曲線 破片	
6	繩文器			砂粒を含む	暗褐色 赤褐色系	半截竹管による平行線	破片
7	繩文器			砂粒を含む	褐褐色		破片
8	繩文器			砂粒を含む	茶褐色系	刻目のある浮線文	破片
9	繩文器			砂粒を含む	暗褐色	竹管による連続押引の施される粘 土紐の浮線文	破片
10	繩文器			砂粒を含む	褐明褐色	刻目のある浮線文	破片
11	繩文器			金雲母目立つ	暗褐色系	半截竹管による平行線文・曲線文 破片	
12	繩文器			砂粒を含む	暗褐色 茶肌色		破片
13	繩文器			雲母が目立つ	褐色 暗褐色	浮線文	破片
14	繩文器			砂粒を含む	褐肌色系 暗い色	平行線文	破片
15	繩文器			砂粒を含む	褐暗褐色	沈線による文様	破片
16	繩文器			金雲母、石英 長石目立つ	黑色系 暗褐色	半截竹管による平行線文・曲線文 破片	
17	繩文器			砂粒を含む	肌色系	半截竹管による平行線・曲線 破片	
18	繩文器			金雲母含む	暗褐色	刻目のある浮線文	破片
19	繩文器			金雲母含む	茶褐色系		破片
20	繩文器			砂粒を含む	黒褐色	平行線文	破片

番号	種類	器形	法量	胎土	色調(内面 外顔)	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径			
21	石器	匙				
22	繩文器			金雲母含む	暗褐色	竹管によって連続押引の施される浮線文 破片
23	繩文器			砂粒を含む	褐褐色	半截竹管による平行線文・曲線文 破片
24	繩文器			金雲母含む	黒褐色系 暗赤褐色	浮線文 破片
25	石器	凹石				
26	繩文器			砂粒を含む	褐褐色	刻目のある浮線文 平行線文 破片
27	繩文器			砂粒を含む	明肌色系	集合条線 破片
28	繩文器			砂粒を含む	褐褐色	刻目のある浮線文 破片
29	繩文器			金雲母を含む	茶褐色系	有孔 破片

<8号住居址出土遺物> (第22・23図)

(単位 cm)

番号	種類	器形	法量	胎土	色調(内面 外顔)	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径			
1	須恵器	环	4.0, 13.0, 7.2	白色粒子を含む	オリーブ灰色	底部回転糸切り痕 少残
2	須恵器	环	3.5, 13.8, 9.4	白色粒子を多く含む	灰色	底部～体部下半へラ削り 少残
3	須恵器	甕	-,-, 16.0	白色粒子を含む	黄灰色 灰褐色	外面一叩目あり 底部破片
4	須恵器	环	4.1, 13.8, 8.0	白色砂粒を含む	灰白色	底部回転糸切り痕 少残
5	須恵器	甕	-, 35.7, -	白・黒粒子を含む	灰白色 淡黄色	内外面一横撫で 口縁部破片
6	須恵器	壺?	-,-,-	白色砂粒を含む	青灰色	外面一叩目 破片
7	須恵器	环	-, 11.4, -	白色粒子を含む	灰色	口縁部破片
8	須恵器	环	-,-, 6.2	白・黒粒子を含む	灰白色 灰褐色	底部回転糸切り後へラ削り 底部破片
9	須恵器	环	-, 12.8, -	白・黒微粒子を含む	黄灰色	

番号	種類	器形	法量 器高・口径・底径		胎土	色調(内面)	整形・特徴・その他
			器高	口径			
10	須恵器	壺			白色粒子を多く含む	青灰色	沈線が横走する 破片
11	土師器	壺	3.6, 13.4, 10.5		赤色砂粒を少々含む	橙色	器体部横方向へラ磨き 底部・ヘラ削り後へラ磨き 刻書あり 内面
12	土師器	壺	7.6, 14.0, 9.0		赤色粒子を含む	橙色	内面・暗文 外面、底部・みがき痕 みこみ部・暗文 内面
13	土師器	壺	—, —, 9.0		密、微砂粒を含む	暗灰黄色～ オリーブ黒色 橙色	内黒 内面一縦へラ磨き、下部横へラ削 り 外画一横へラ磨き 底部・ヘラ削り後へラ磨き 破片
14	土師器	壺	6.2, 14.8, 9.0		赤色粒子を含む	橙色 におい赤褐色	内面・暗文 外面一横方向のみがみ みこみ部一暗文 底部・みがき痕 15と同一個体か 内面
15	土師器	壺	—, —, 9.8		赤色微粒子を含む	橙色	内面・暗文、みこみ部暗文あり 外面一横方向のヘラ磨き 底部へラ削り乃至みがき 底部破片
16	土師器	壺	—, —, 5.9		白色粒子 金雲母が みられる	褐灰色	外面一全体下半～底部にかけて ヘラ削り 底部破片
17	須恵器	壺	—, —, —		微砂粒を含む	におい黄橙色 褐灰色	破片
18	土師器	高台付壺	—, —, 8.0		粗い赤色粒子 白色粒子を含む	におい褐色 一部灰褐色	底部破片
19	土師器	壺	—, 14.4, —		白・赤砂粒を含む	橙色	内面一放射状暗文 破片
20	土師器	皿?	2.1, 12.2, 8.8		青	橙色	内面一横撫で 破片
21	土師器	壺	—, 23.8, —		赤・白・黒色 粒子を含む	淡黃褐色 内面一部橙色	内外面一横撫で 口縁部破片
22	土師器	壺	—, 25.2, —		白色粒子 金雲母 を多く含む	におい褐色 口縁一部橙色	内外面一横撫で 口縁部破片
23	土師器	壺	—, 31.4, —		粗い砂粒を含む	におい黄橙色 淡黃褐色	内面一縦刷毛目後横撫で 外画一縦刷毛目 口縁部破片
24	土師器	壺	—, 35.0, —		砂粒を含む	におい褐色 一部橙色	内外面一横撫で 口縁部破片
25	土師器	壺	—, —, —		粗い白色粒子 を多く含む	におい橙色	内外面一横撫で 頭部破片
26	鉄						
27	鉄	線					
28	鉄	釘?					
29	鉄						

番号	種類	器形	法量	胎土	色調(内面 外側)	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径			
30	鉄					
31	鉄	鐵				

<9号住居址出土遺物> (第24・25図)

(単位 cm)

番号	種類	器形	法量	胎土	色調(内面 外側)	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径			
1	須恵器	蓋	3.4, 17.9, -	白色粒子を含む	灰黄褐色 オリーブ灰色	外面上部回転ヘラ削り %残
2	須恵器	坏	3.9, 13.2, 6.2	砂粒を含む	灰白色	底部回転糸切り痕 %残
3	須恵器	坏	-,-, 7.0	白色砂粒を含む	灰白色	底部回転糸切り痕 底部破片
4	須恵器	坏	4.8, 13.8, 8.2	赤・黒・白色粒子を含む	浅黄褐色 一部灰色	底部回転糸切り痕 底部に墨書きがあるが不鮮明 口縁一部欠損
5	須恵器	坏	-,-, 6.0	白色粒子を含む	赤灰色 黄褐色	底部回転糸切り痕 破片
6	須恵器	高台付坏	3.4, 13.2, 9.8	白色微粒子を含む	褐色 黄色 口縁部灰白	底部回転糸切り痕 付高台 %残
7	須恵器	坏	4.5, 13.6, 6.3	赤・白・黑色粒子を含む	淡黄色 一部灰白色	底部回転糸切り痕 墨書きあり 口縁部一部欠損
8	須恵器	坏	4.7, 12.8, 7.0	白・黒粒子を含む	灰黄色 一部黄灰色	底部回転糸切り痕 " 外周ヘラ削り %残
9	須恵器	坏	-,-,-	白色粒子 金墨母を含む	明黄褐色 に赤い褐色	外面-胸下半ヘラ削り 底部 滲み出しによる高台頃 回転糸切り痕 破片
10	須恵器	坏	-,-, 10.4	白・黒粒子を含む 一部黒変	灰白色	底部ヘラ削り 破片
11	須恵器	蓋	-,-,-	白色砂粒を含む	橙色 に赤い褐色	外面-叩目のあと撫で 破片
12	須恵器	蓋?	-,-, 16.4	白色粒子 墨母を含む	灰色 オリーブ 灰色	外面-刷毛目痕があるが不鮮明 自然釉 破片
13	須恵器	四耳 蓋	-,-,-	白色粒子を含む	褐灰色	外面-横走する隆帯に月状の突起 がつく。突起には穿孔がみ られる 破片
14	須恵器	蓋	-,-, 27.6, -	砂粒を含む	淡黄色-部灰 灰色	内面-自然釉 口縁部破片
15	須恵器	蓋	-,-,-	砂粒を含む	に赤褐色	内面-横撫で 外面-叩目 土師質 破片
16	土師器	坏	-,-, 6.0	密	明赤褐色	底部回転糸切り痕 底部破片

番号	種類	器形	法量		胎土	色調(内面 外顔)	整形・特徴・その他
			器高	口径			
17	土師器	壺	—	—, 8.0	白色砂粒を含む	明赤褐色	底部刻書 底部破片
18	土師器	壺	5.4, 16.2, 11.0	—	赤色粒子を含む	にぶい橙色	破片
19	土師器	壺	—	—, —	赤色砂粒を含む	橙色	底部刻書あり 底部破片
20	土師器	壺	—	—, 7.7	砂粒を含む	にぶい橙色	内部みがき痕 みこみ部暗文あり 破片
21	土師器	かわらけ	—	7.8, —	白色粒子を含む	にぶい黄橙色	口縁部破片
22	繩文器 土器	深鉢	—	—, —	金雲母を多く含む	黒褐色	沈線で模様が施されている 口縁部破片

<10号住居址出土遺物> (第26・27・28図)

(単位 cm)

番号	種類	器形	法量		胎土	色調(内面 外顔)	整形・特徴・その他
			器高	口径			
1	須恵器	蓋	—	—, —	白・黒粒子を含む	灰色	外面-回転ヘラ削りがみられる つまみ部破片
2	須恵器	壺	3.6, 12.6, 5.8	—	粗い白色粒子 砂粒を含む	黄灰色	底部ヘラ削り %残
3	須恵器	壺	3.9, 13.2, 8.8	—	白・黒粒子を含む	灰色	底部回転系切り後ヘラ削り 付高台 %残
4	須恵器	壺	4.0, 13.8, 6.0	—	赤・白粒子を含む	黄灰色	外面-底部回転系切り後刻書あり %残
5	須恵器	壺	3.7, 12.8, 6.0	—	白色粒子を多く含む	にぶい黄橙色 褐灰色	外面-底部回転系切りが体部下半 に尾をひいている 後ヘラ削り %残
6	須恵器	蓋	—, 13.0, —	—	白色粒子を含む	暗オリーブ 灰色	自然釉がかかる 口縁部破片
7	須恵器	甕?	—	—, —	白色粒子 雲母を含む	灰色	外面-沈線による波状の横連続文 自然釉がかかる 破片
8	須恵器	甕?	—	—, —	白・黒粒子を含む	灰色	外面-沈線による波状の横連続文 口縁部破片
9	須恵器	甕?	—	—, —	粗い白色粒子を多く含む	灰褐色	外面-沈線による波状の横連続文 口縁部破片
10	土師器	蓋	—	25.4, —	赤・白色粒子を含む	橙色	内面-暗文あり 破片
11	土師器	蓋	4.0, 16.9, —	—	白・赤・黒色粒子を含む	にぶい橙色	内面-暗文あり(崩滅により不鮮明) 外顔-上部にヘラ削りがみられる %残
12	土師器	壺	5.2, 13.0, 5.6	—	赤色粒子 金雲母を含む	橙色	内面-暗文 外顔-体部下半底部ヘラ削り %残

番号	種類	器形	法量		胎土	色調(内面 外面)	整形・特徴・その他
			器高	口径・底径			
13	土師器	壺	—	—, 9.8	白・赤粒子を含む	橙色	内面一暗文あり(磨滅により不鮮明) 底部付高台 底部破片
14	土師器	壺	4.3, 14.6,	8.0	白・赤粒子を含む	にぶい褐色 橙色	外面部 %残
15	土師器	深鉢	—, 33.2,	—	白・黒粒子を含む	橙色	内面一横刷毛目 外面部一継刷毛目 破片
16	土師器	壺	—, —,	6.8	赤色粒子砂粒を含む	にぶい橙色	内面一横刷で 外面部一削り(磨滅により不鮮明) 底一底部破片
17	鉄	?					

<11号住居址出土遺物> (第29・30・31図)

(単位 cm)

番号	種類	器形	法量		胎土	色調(内面 外面)	整形・特徴・その他
			器高	口径・底径			
1	須恵器	蓋	—, —, —	—	白・黒粒子を含む	灰色	外面部一回転ヘラ削り つまみ部破片
2	須恵器	壺	3.9, 11.6,	5.4	白・黒粒子を含む	灰色 一部灰白色	底部回転糸切り痕 完形
3	土師器	壺	6.2, 15.4,	9.0	赤色粒子を含む	橙色	内面一暗文 外面部一暗文 底部一高台付、回転糸切り痕 %残
4	土師器	壺	4.0, 10.9,	4.7	金雲母 赤色砂粒を含む	橙色 一部にぶい黄橙色	内面一暗文あり 外面部一ロクロ彫形後ヘラ削り 底部一回転糸切り後ヘラ削り 口縁部一部欠損
5	土師器	壺	4.0, 11.7,	4.9	赤・黒粒子を含む	にぶい橙色	内面一暗文あり(磨滅により不鮮明) 外面部一全体下半ヘラ削り 底部一回転糸切り後外周ヘラ削り %残
6	土師器	壺	4.2, 11.0,	4.8	赤色粒子を含む	橙色	内面一暗文 外面部一全体下半ヘラ削り 底部一回転糸切り後外周ヘラ削り 口縁部破損
7	土師器	壺	4.3, 10.4,	5.4	赤色粒子を含む	橙色	内面一暗文あり 外面部一全体下半ヘラ削り 底部一回転糸切り後外周ヘラ削り %残
8	土師器	壺	4.6, 11.1,	4.6	赤・白色粒子を含む	橙色	内面一暗文あり 外面部一全体下半ヘラ削り 底部一回転糸切り後外周ヘラ削り 完形
9	土師器	壺	4.5, 10.0,	3.8	赤色粒子を含む	橙色	内面一暗文あり 外面部一全体下半ヘラ削り 底部一回転糸切り後外周ヘラ削り %残
10	土師器	壺	4.3, 10.4,	4.8	赤・白色粒子を含む	橙色	内面一暗文 外面部一全体下半ヘラ削り 底部一回転糸切り後外周ヘラ削り 口縁部一部欠損
11	土師器	壺	4.7, 11.3,	5.9	赤色粒子を含む	橙色 一部にぶい 橙色	内面一暗文あり(磨滅により不鮮明) 外面部 ヘラ削り 底部一回転糸切り後外周ヘラ削り 縫割アリ 完形
12	土師器	壺	4.2, 11.0,	6.1	赤色粒子を含む	にぶい橙色	内面一暗文あり(磨滅により不鮮明) 外面部一全体下半ヘラ削り 底部一回転糸切り後外周ヘラ削り %残

番号	種類	器形	法量		胎土	色調(内面 外顔)	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径				
13	土師器	壺	4.3, 10.8, 5.2	赤・白色粒子を含む	にぶい褐色	外面-全体下半へラ削り 底部-回転糸切り後外周へラ削り 完形	
14	土師器	壺	4.3, 10.4, 5.4	赤色粒子を含む	橙色	内面-晴文 外面-全体下半へラ削り 底部-回転糸切り後外周へラ削り 刻畫	完形
15	土師器	皿	3.0, 14.6, 5.8	赤・白・黒色粒子を含む	一部にぶい褐色 にぶい橙色	内面-みこみ部に晴文あり (磨滅により不鮮明) 外面-底部～胴下部回転へラ削り 刻畫	完形
16	土師器	皿	3.5, 15.0, 5.8	赤色粒子を含む	褐色	内面-螺旋状暗文 外面-胴下半回転へラ削り	少欠
17	土師器	甕	-, 25.6, -	金雲母、砂粒を含む	にぶい赤褐色 赤褐色	内面-横刷毛目 外面-紙刷毛目	口縁部破片
18	土師器	甕	-, 24.8, -	砂粒、金雲母を多く含む	にぶい褐色 にぶい褐色	内面-横刷毛目 外面-紙刷毛目 口縁部-横擦で 口縁～胴部の破片	
19	土師器	甕	-, -, 7.6	粒い砂粒を含む	明赤褐色 にぶい赤褐色	内面-横刷毛目がみられる 外面-紙刷毛目(磨滅により不鮮明) 底部-木葉痕	底部～胴部破片
20	土師器	小甕	13.2, 17.0, 8.2	金雲母、白色粒子を含む	赤褐色	内面-横刷毛目 外面-紙刷毛目 底部-木葉痕	少欠損
21	鉄						
22	鉄						
23	鉄						
24	鉄	鎌					
25	鉄						
26	石器						
27	鉄	刀子					

<12号住居址出土遺物> (第32・33図)

(単位 cm)

番号	種類	器形	法量		胎土	色調(内面 外顔)	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径				
1	土師器	壺	4.1, 10.4, 5.8	白色粒子を含む 赤色粒子を含む	褐色 一部淡黃褐色	外面-全体下半へラ削り 内面-晴文あり 底部-へラ削り 口縁部-一部欠損	
2	土師器	小甕	-, 14.8, -	砂粒を含む	にぶい赤褐色 一部黒茎	外面-縦刷毛目整形 内面-横刷毛目整形	口縁部破片
3	土師器	甕	-, 26.2, -	砂粒、金雲母を含む	明赤褐色 一部にぶい赤褐色	口縫部-横擦で 外面-縦刷毛目整形 内面-横刷毛目整形	口縁部破片
4	土師器	甕	-, 28.0, -	白色粒子を含む 金雲母を含む	明赤褐色	外面-縦刷毛目整形 内面-横刷毛目密があるが磨滅のために不鮮明	破片

番号	種類	器形	法量		胎土	色調(内面 外顔)	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径				
5	土師器	甕	—, —, 11.2	砂粒・金雲母を多く含む	にぶい赤褐色 暗赤褐色 みごみ部 黒変	外面一縦刷毛目(磨滅により不鮮明) 内面一横刷毛目 胴下部破片	
6	土師器	壺	5.2, 12.4, 6.6	赤色粒子を含む	にぶい褐色	内面一暗文	1/2残

<1号土坑出土遺物> (第34図)

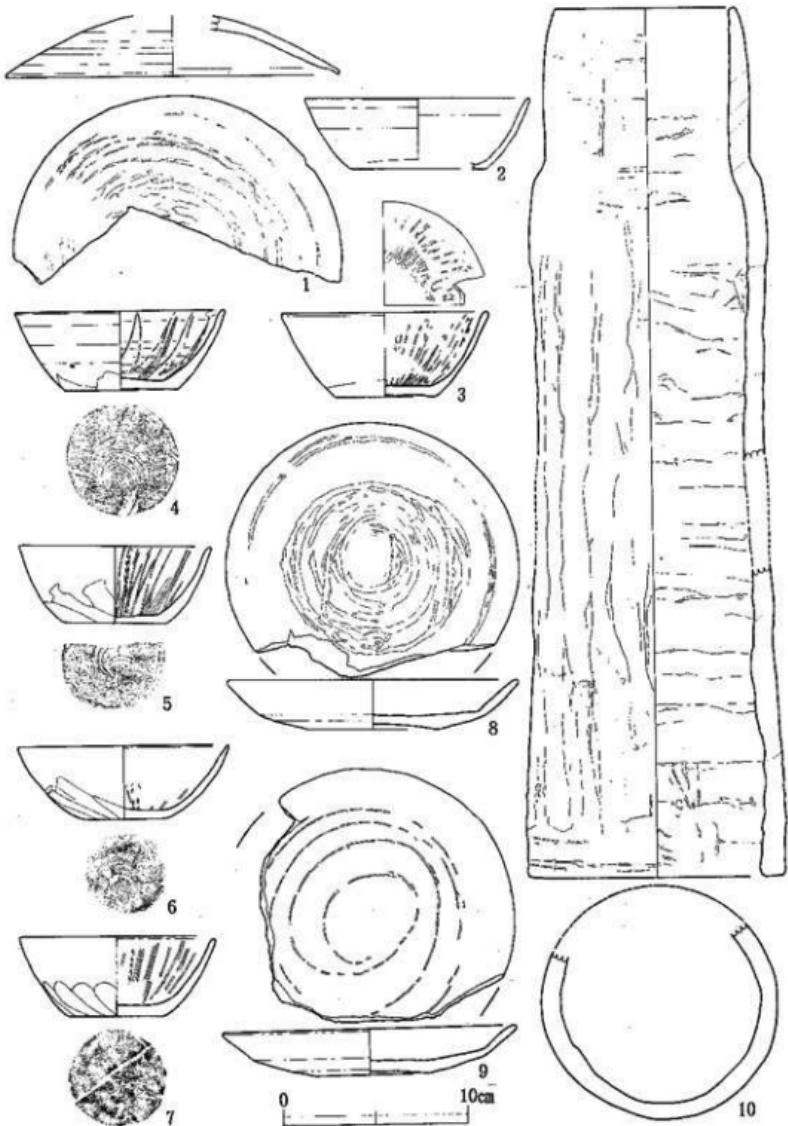
(単位 cm)

番号	種類	器形	法量		胎土	色調(内面 外顔)	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径				
1	鉄	刀					

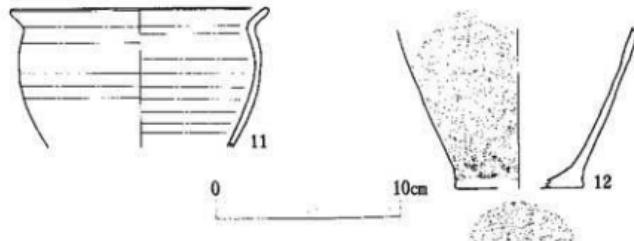
<造構外出土遺物> (第35・36図)

(単位 cm)

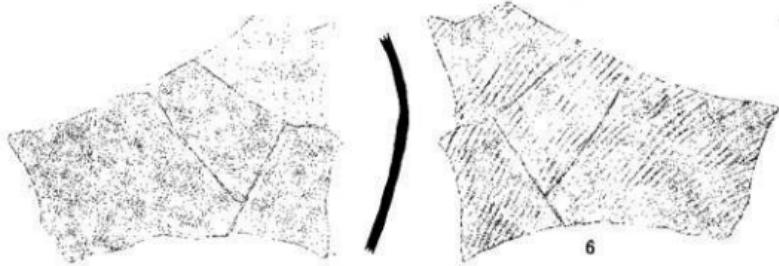
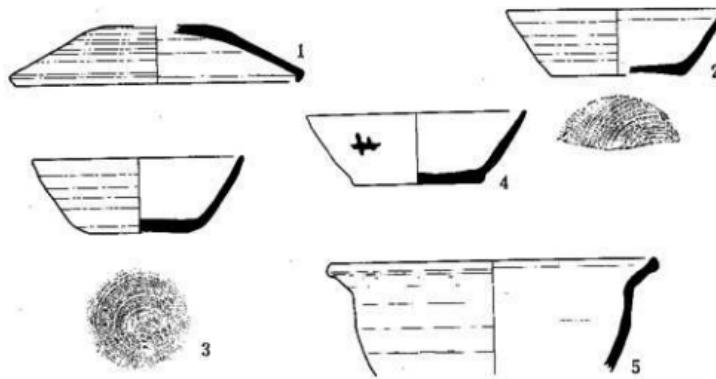
番号	種類	器形	法量		胎土	色調(内面 外顔)	整形・特徴・その他
			器高・口径・底径				
1	繩文器	深鉢	—, —, —	金雲母・砂粒を多く含む	にぶい赤褐色 赤褐色一部 黒褐色	外面一竹管状工具による、円形の 一文と半載竹管による連続 押引き文がめぐる。胴部は 結節網文が施こされる 胴部破片	
2	繩文器			砂粒を含む	暗褐色 褐茶褐色	平行線文・曲線文	破片
3	繩文器			砂粒を含む	褐肌色系	集合条線	破片
4	繩文器			砂粒を含む	褐茶褐色系	刻目のある浮線文 有孔	破片
5	繩文器			砂粒を含む	暗褐色	連続押引文	破片
6	繩文器			砂粒を含む	褪白褐色	綾衫状文	破片
7	繩文器			砂粒を含む	褪白褐色	綾衫状文	破片
8	繩文器			砂粒・雲母を含む	褐色系	平行線文・曲線文	破片
9	繩文器			砂粒を含む	白肌色系	沈線による区画	破片
10	須恵器	甕	—, 26.0, —	白色粒子を含む	灰 灰色 黄灰色	クロロ撫で 自然釉	1/1縁部破片
11	須恵器	壺	—, 11.2, —	黒・白色粒子を含む	灰褐色	口縁部自然釉 外面一叩目あり 口縁部・胴部破片(別物か?)	
12	土師器	壺	1.9, —, 9.0	赤色粒子を含む	棗色	内面一全面暗文 外面一へラ削りがあるが不鮮明 底部にみがき痕	底部破片
13	土師器	壺	3.2, 13.9, 9.0	白・黒微粒子を含む	灰 黄褐色 一部黒變	底部へラ削り	1/2残
14	土師器	壺	2.7, 12.8, 7.0	砂粒を含む	棗色	内面一全面に暗文あり 外顔一底部～体部にへラ削り、そ の後みがかれている	1/2残



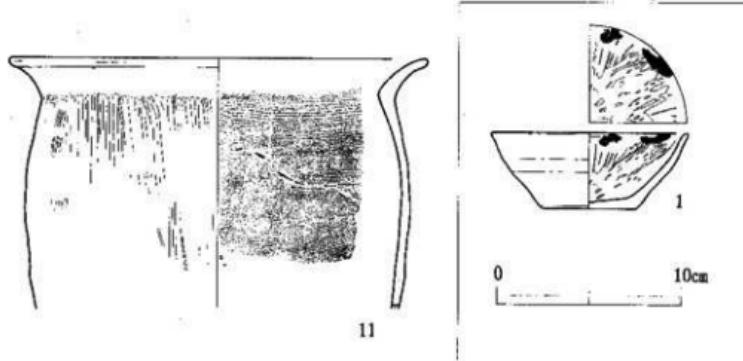
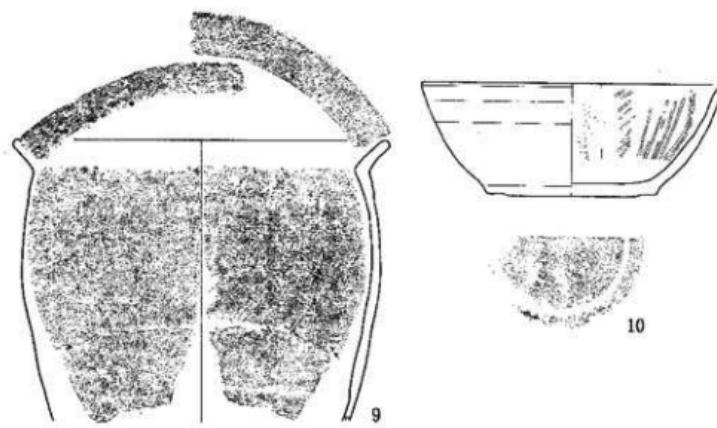
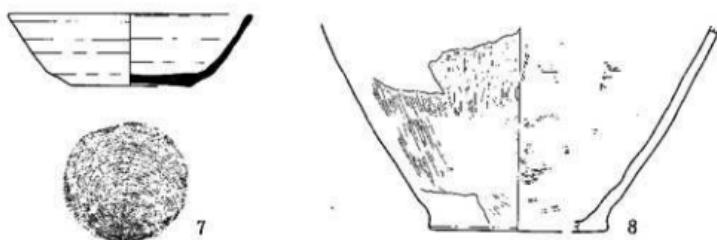
第11図 1号住居址出土遺物 (1/3)



第12図 1号住居址出土遺物 (1/3)

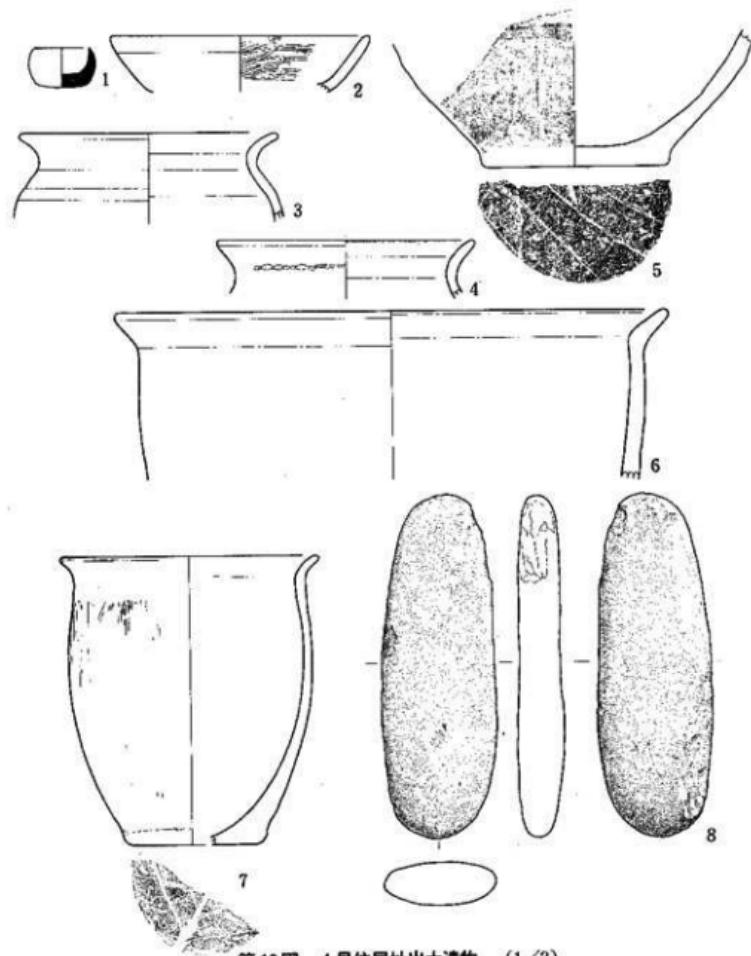


第13図 2号住居址出土遺物 (1/3)

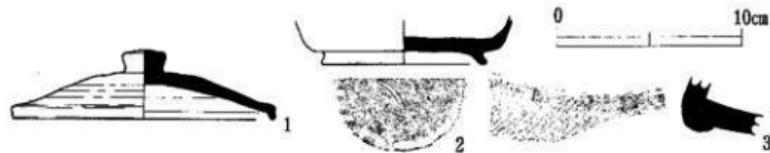


第14図 2号住居址出土遺物 (1/3)

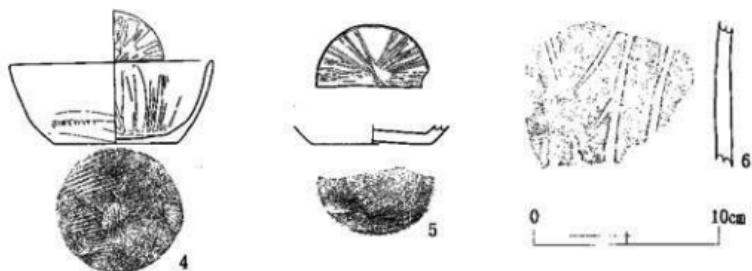
第15図 3号住居址出土遺物 (1/3)



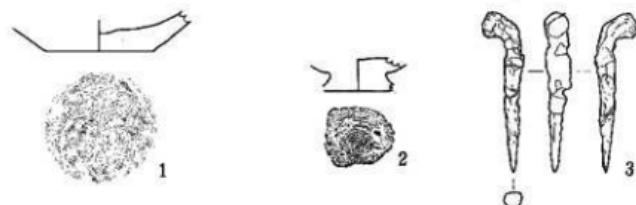
第16図 4号住居址出土遺物 (1/3)



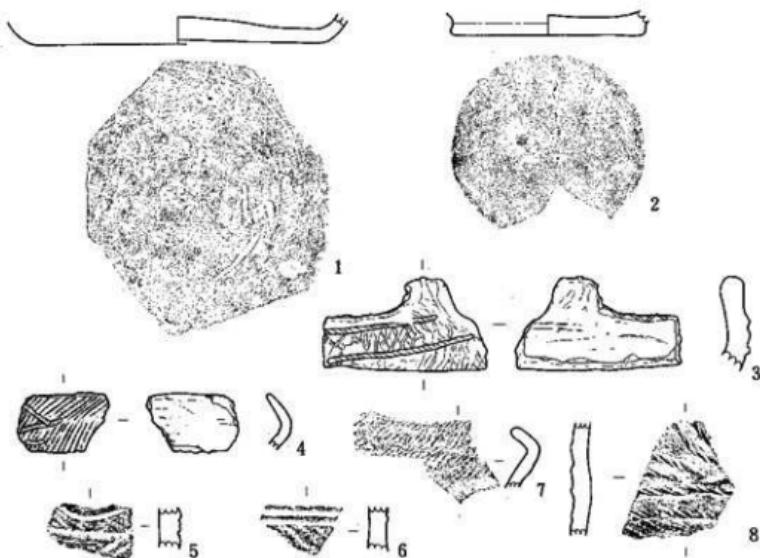
第17図 5号住居址出土遺物 (1/3)



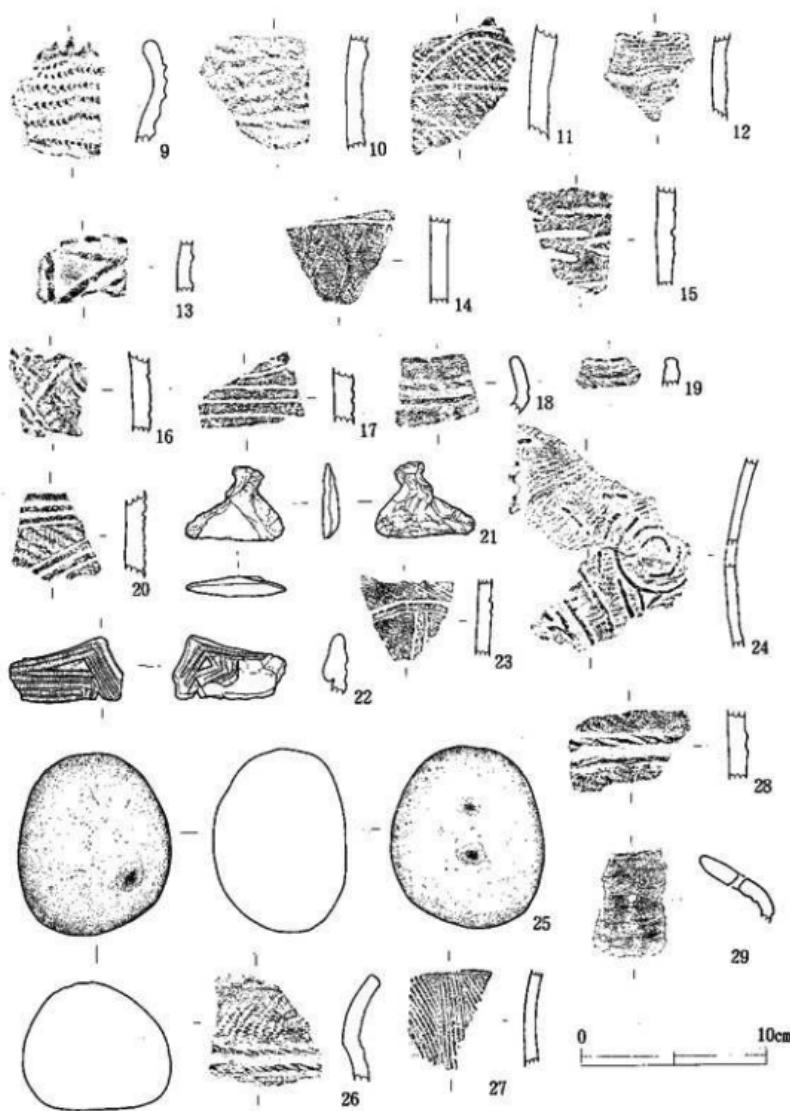
第18図 5号住居址出土遺物 (1/3)



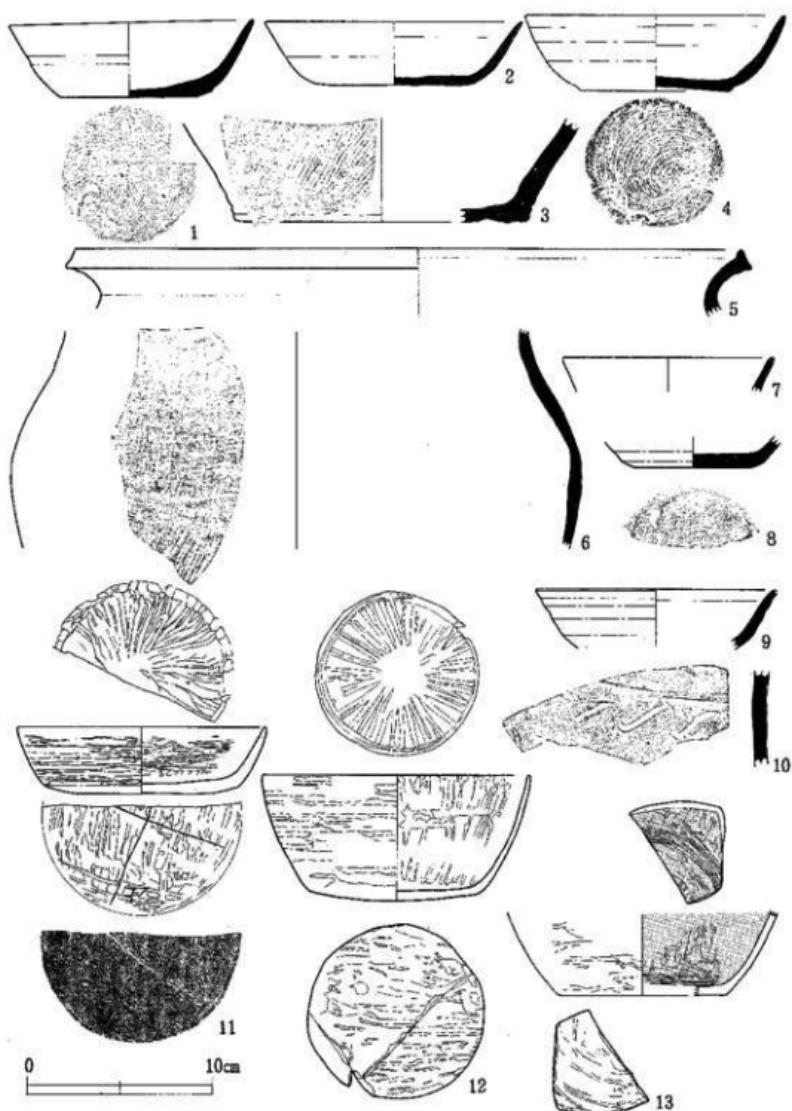
第19図 6号住居址出土遺物 (1/3)



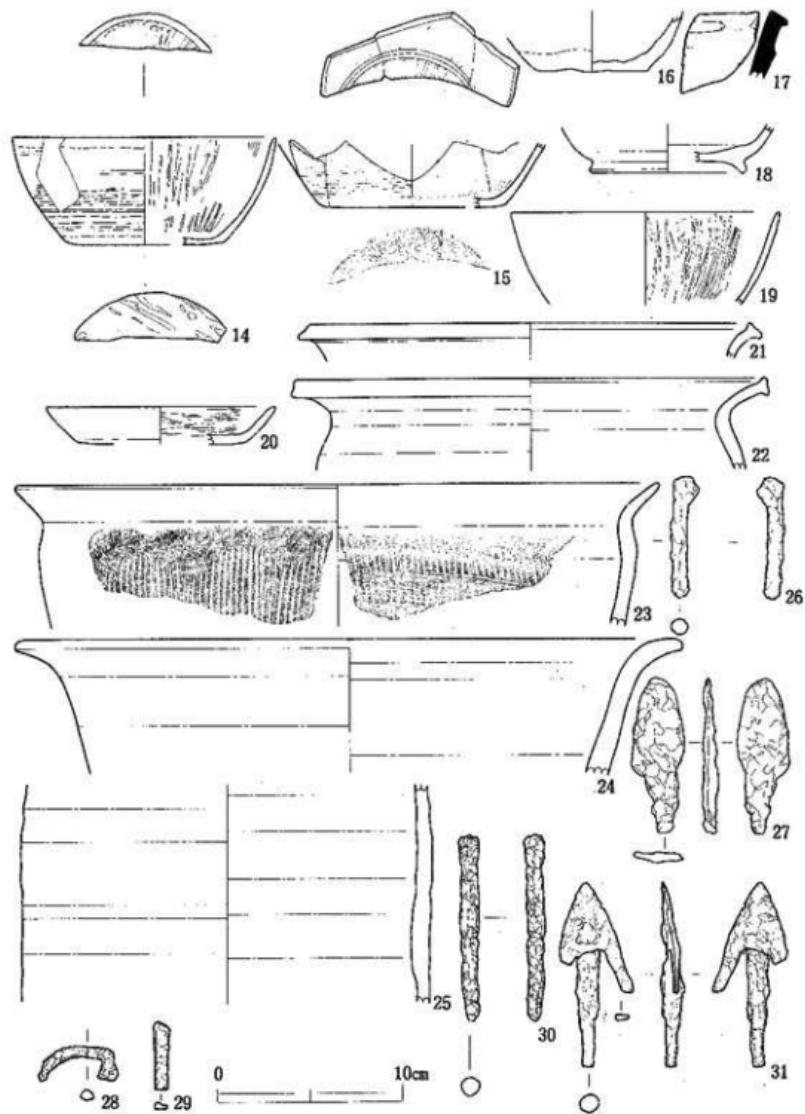
第20図 7号住居址出土遺物 (1/3)



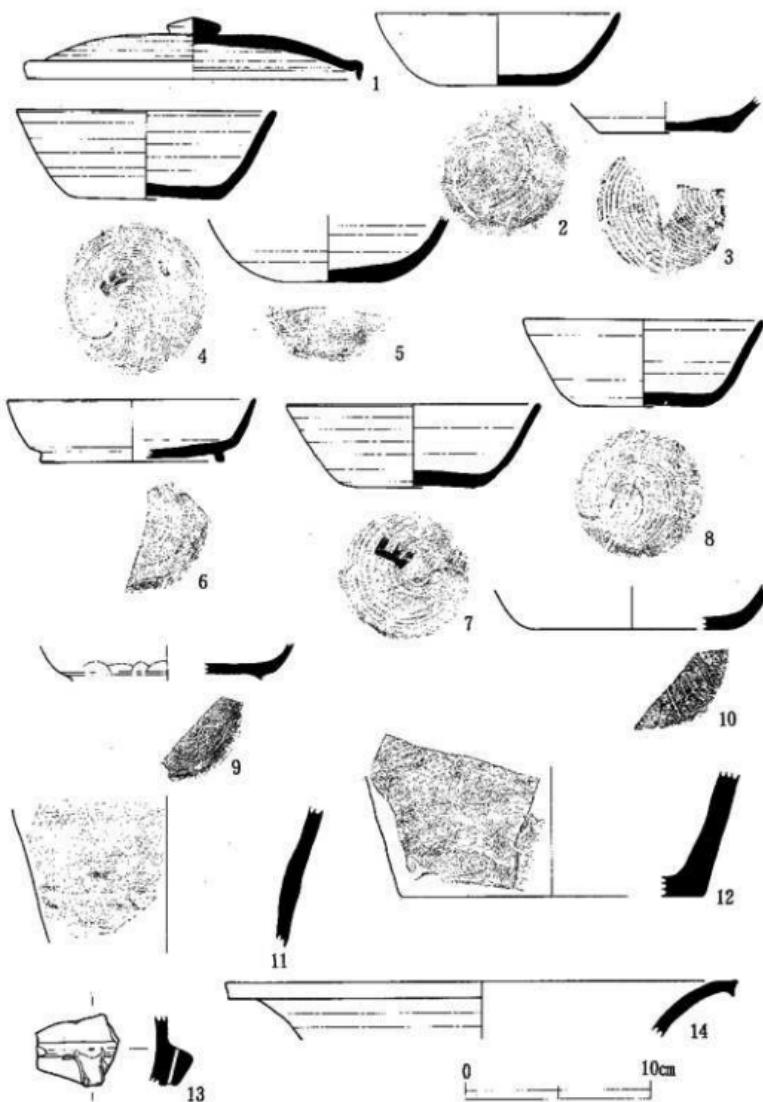
第21図 7号住居址出土遺物 (1/3)



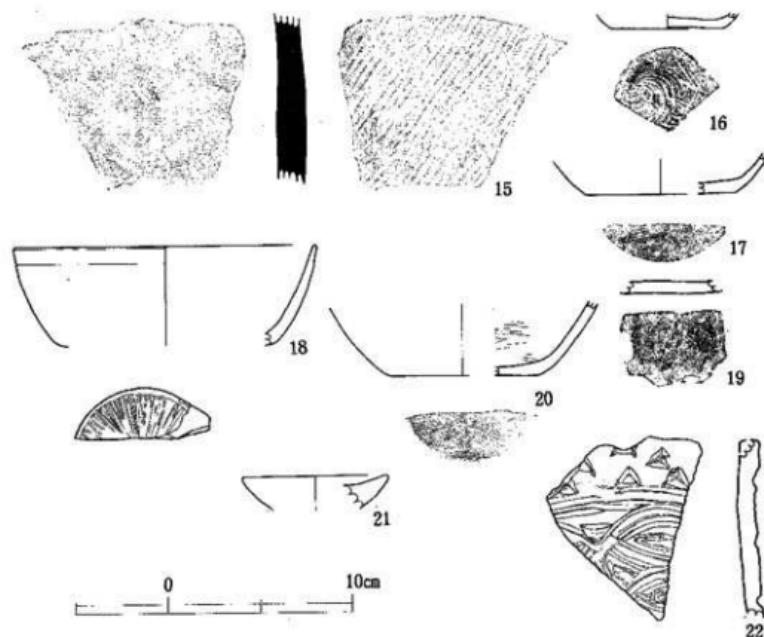
第22図 8号住居址出土遺物 (1/3)



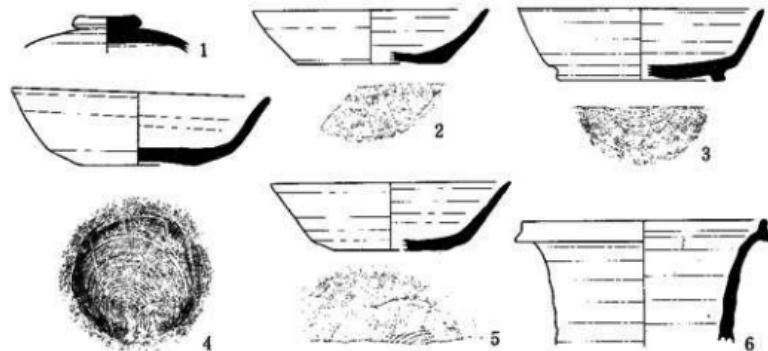
第23図 8号住居址出土遺物



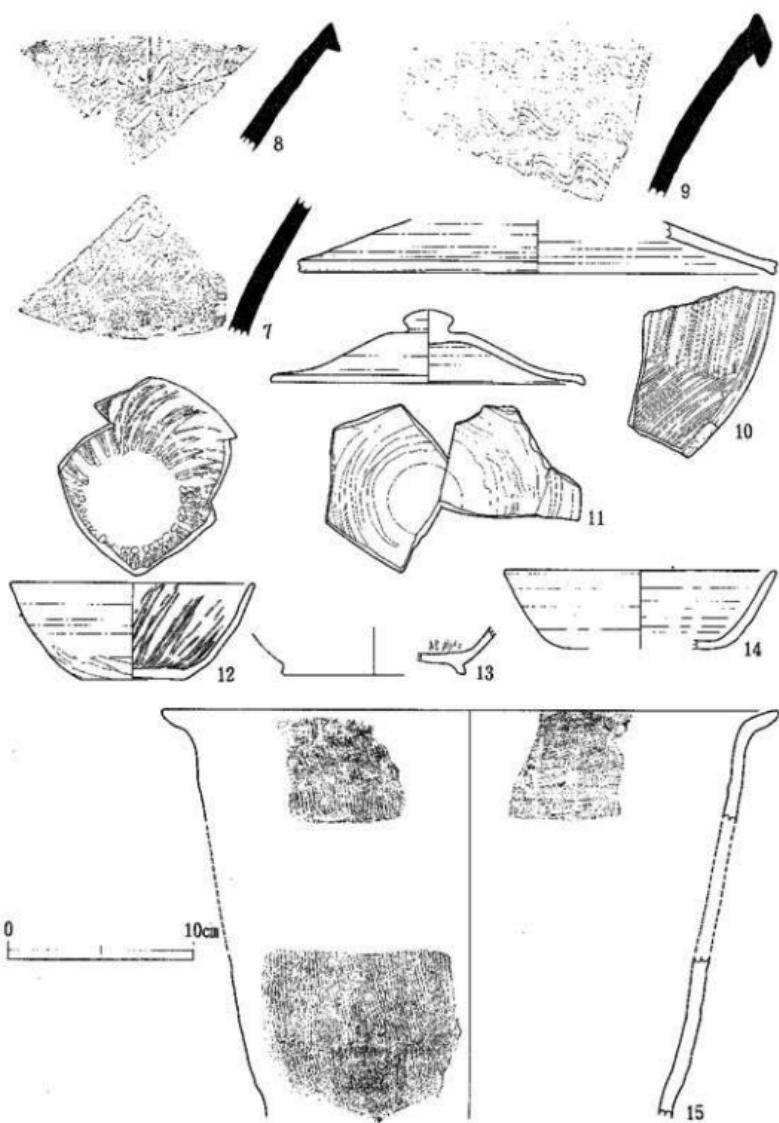
第24図 9号住居址出土遺物 (1/3)



第25図 9号住居址出土遺物 (1/3)



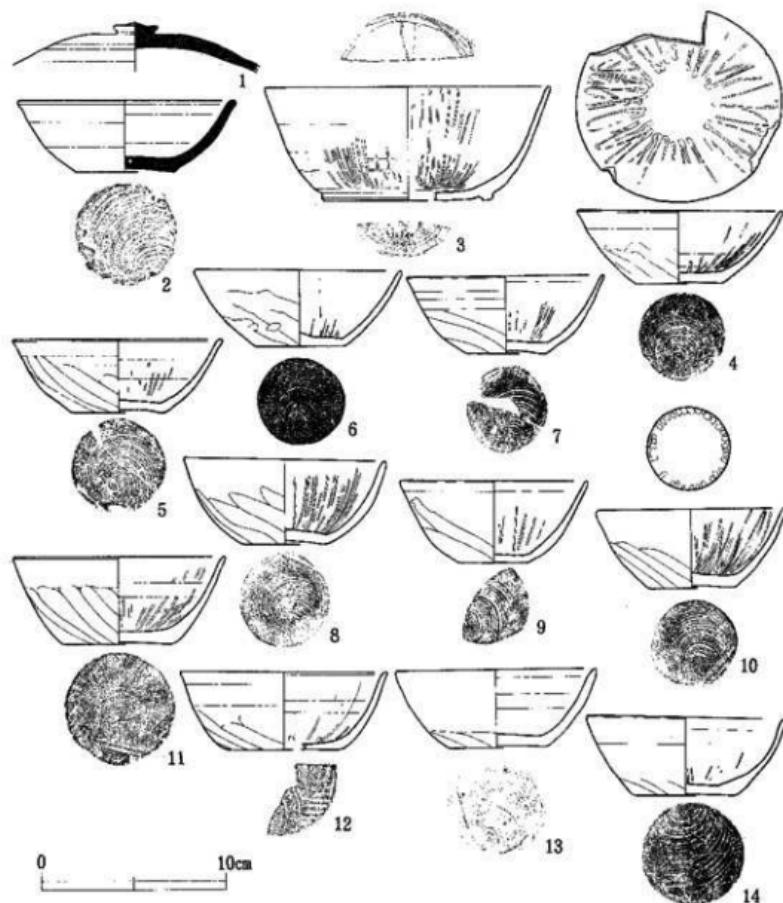
第26図 10号住居址出土遺物 (1/3)



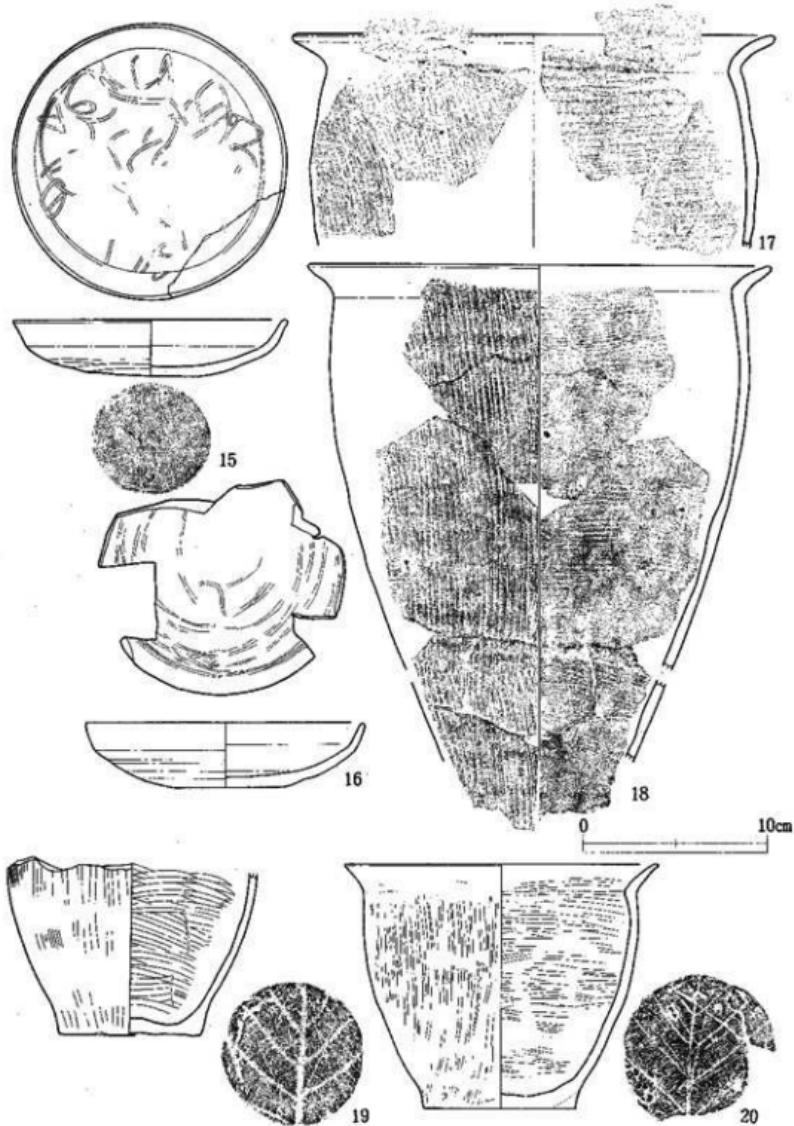
第27図 10号住居址出土遺物 (1/3)



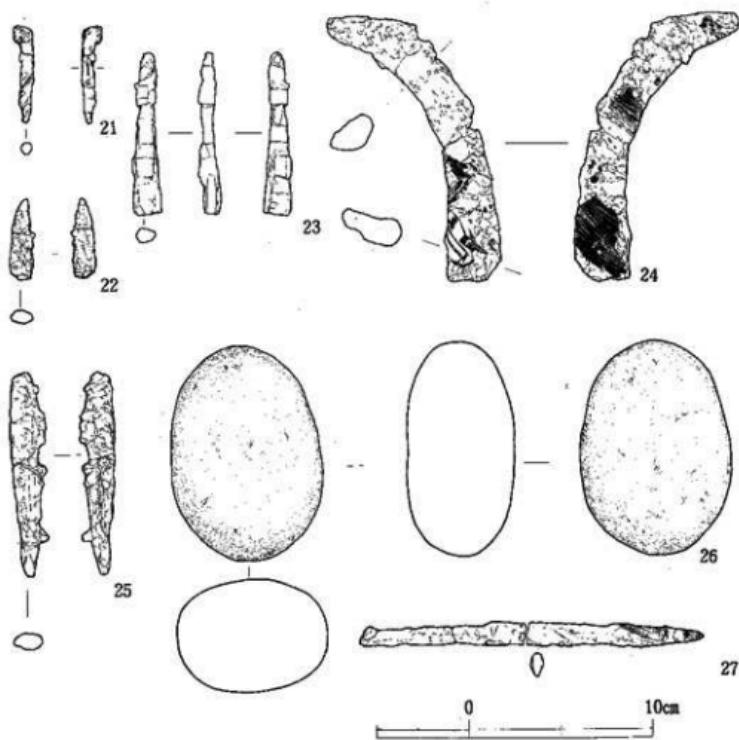
第28図 10号住居址出土遺物 (1/3)



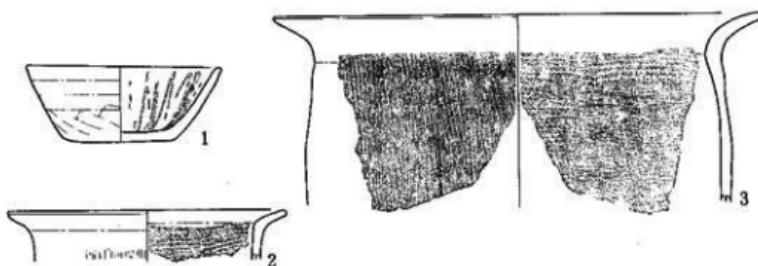
第29図 11号住居址出土遺物 (1/3)



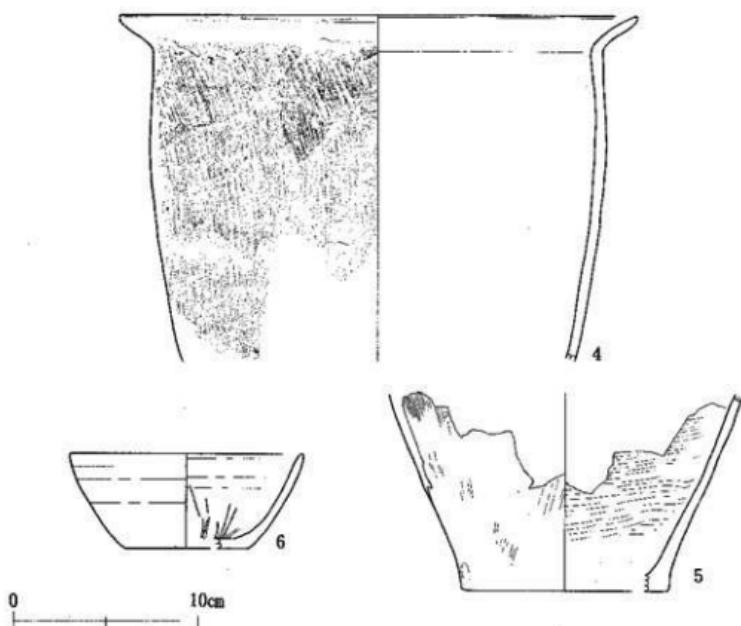
第30図 11号住居址出土遺物 (1/3)



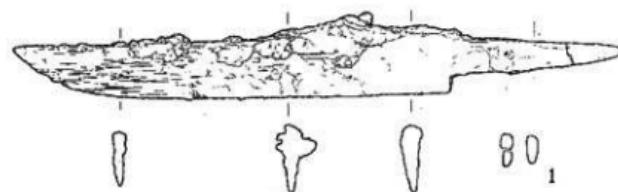
第31図 11号住居址出土遺物 (1/3)



第32図 12号住居址出土遺物 (1/3)

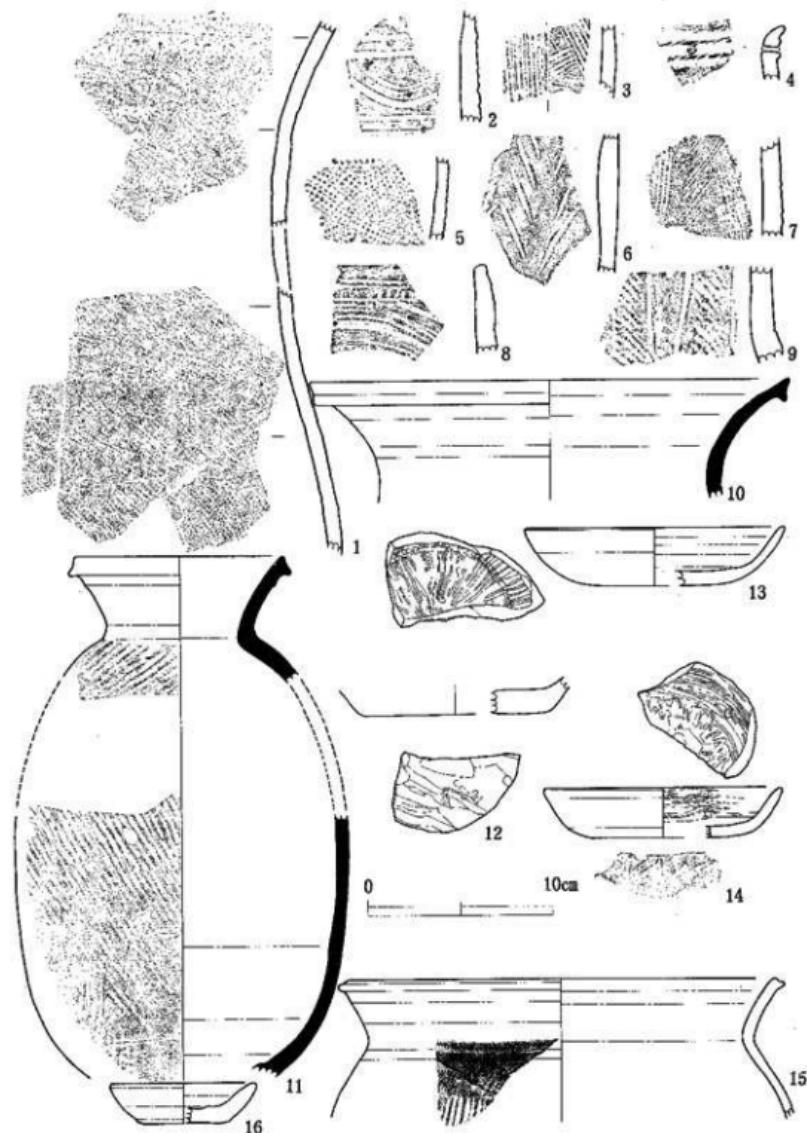


第33図 12号住居址出土遺物 (1/3)



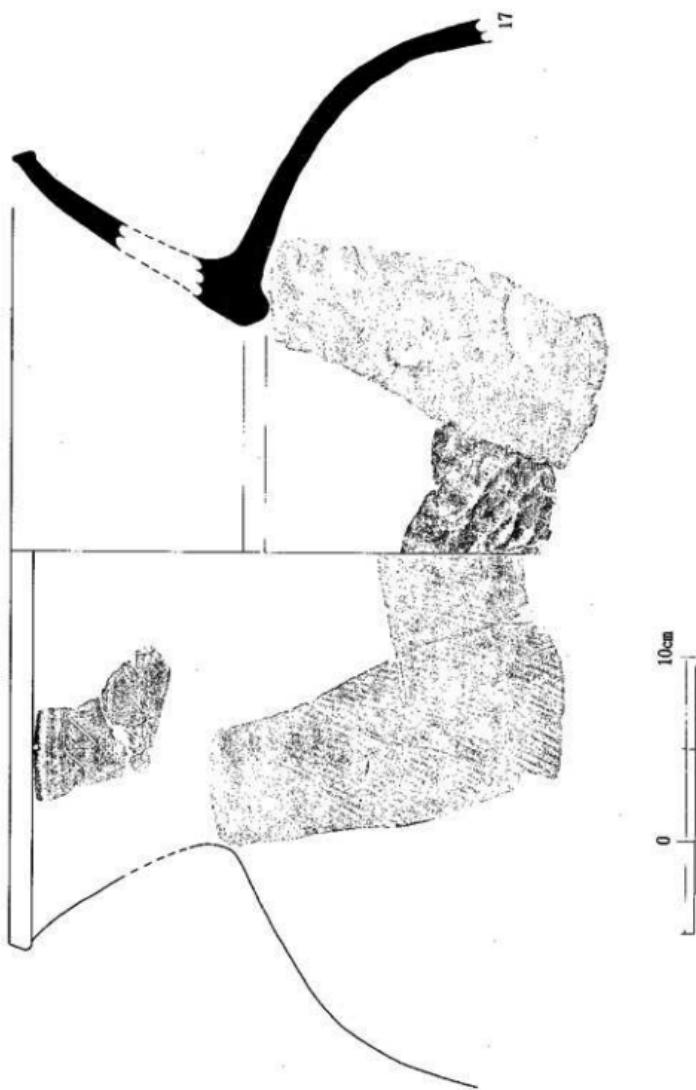
第34図 1号土坑出土遺物 (1/3)

番号	種類	器形	法量		胎土	色調(内面 外面)	整形・特徴・その他
			器高	口径・底径			
15	土師器	甕	-	23.0,	-	砂粒、金雲母 を多く含む	にぶい橙色
16	土師質 かわらけ		2.2,	7.7,	4.2	白色粒子 金雲母を含む	にぶい橙色
17	須恵器	甕	-	42.4,	-	粗い砂粒 を含む	灰褐色 褐灰色
							内面-横刷毛目 外面-口縁～頸部にかけて横走す る沈線による波状文がみら れる 肩部は叩目 口縁部、頸～胸部破片



第35図 遺構外出土遺物 (1/3)

第36図 遺物出土位置 (1/3)



## VII 荘崎市上本田遺跡炭化植物遺体の同定

はじめに

上本田遺跡は塩川の河岸段丘の低位面に位置し、平安時代の集落が分布している。集落を構成する住居址からは、建築材や燃料材とされる炭化植物遺体が検出されている。ここでは、1・5・8・10・11号住から検出した試料の植物体の同定を行った。

### 1 試 料

試料は、1・5・8・10・11号住居址から得られた炭化植物遺体には建築材や燃料材と考えられる炭化材と繊維状の炭化草本類があった。

試料の番号は、試料の質の区別はとくなく、住居址毎にまとめられている。各住居址には、一括試料とされたものが2～6試料ずつ含まれていたので、当社にてa～fの区別をした。またこれら全ての試料は便宜上試料番号1～99まで付して扱った（表1）。

同定に関して、炭化材は材同定、炭化植物繊維は植物珪酸体分析を行った。

### 2 方 法

#### 2-1 材同定

試料を乾燥させたのち木口・柵口・板目の3断面を作製、実体顕微鏡・反射顕微鏡・走査型電子顕微鏡（無蒸着・反射電子検出型）で観察・同定する。

#### 2-2 植物珪酸体分析

植物繊維を数片採取し、過酸化水素水( $H_2O_2$ )・塩酸(HCl)処理により有機物を除去し、乾燥させる。これを、封入（封入剤：ブリュウラックス）し、プレパラートを作成して、400倍の光学顕微鏡下で観察・同定する。植物珪酸体の同定は、近藤・佐瀬（1986）の分類に基づいて行う。

### 3 結 果

#### 3-1 材同定

99試料のうち18試料は草本類（イネ科）であり、残りの81試料が6種類に同定された（表1～3）。材の主な解剖学的特徴や現生種の一般的な性質は、次のようなものである。一般的な性質などについては「木の事典 第1巻～第17巻」（1979～1982）も参考にした。

##### ・マツ属複維管束亜属 (*Pinus* subgen. *Diploxyylon*) マツ科

早材部から晚材部への移行は急～やや緩やかで、晚材部の幅は広く、年輪界は明瞭。樹脂細胞ではなく、樹脂道が認められる。放射組織は仮道管、柔細胞とエビセリウム細胞よりなり、仮道管内壁には顕著な鋸歯状の突出が認められる。分野葉孔は窓状、単列、1～15細胞高。

複雜管束亜属いわゆる二葉松類には、アカマツ (*Pinus densiflora*)、クロマツ (*P. thunbergii*)、リュウキュウマツ (*P. luchuensis*) の3種がある。アカマツとクロマツは本州・四国・九州に分布するが、クロマツは暖地の海沿いに多く生育し、また古くから砂防林として植栽されてきた。リュウキュウマツは琉球列島特産である。材は重硬で強度が大きく、保存性は中程度であるが耐水性に優れる。建築・土木・建具・器具・家具材など広い用途が知られている。

・モミ属 (*Abies*) マツ科

早材部から晚材部への移行は比較的緩やかで、晩材部の幅は薄く、年輪界は明瞭。樹脂細胞はないが、傷害樹脂道が認められることがある。放射仮道管はなく、放射柔細胞の壁は粗く、末端壁にはじゅず状の肥厚が認められる。分野導孔はスキ型 (*Taxodioide*) で1~4個。放射組織は単列、1~20細胞高。

モミ属には、モミ (*Abies firma*)、ウラジロモミ (*A. homolepis*)、アオモリトドマツ (*A. mariesii*)、シラベ (*A. veitchii*)、アカトドマツ (*A. sachalinensis*) の5種があり、アカトドマツを除く4種はいずれも日本特産種である。モミは本州（秋田・岩手県以南）・四国・九州の低地～山地に、ウラジロモミは本州中部（福島県以南）・紀伊半島・四国の山地～亜高山帯に、アオモリトドマツは本州（福島県以北）の亜高山～高山帯に、シラベは本州中部（福島県以南）・奈良県・四国に、アカトドマツは北海道に分布する常緑高木である。モミを除いては山地～高山・寒冷地に生育する。モミの材はやや軽軟で、強度は小さく、割裂性は大きい。加工は容易で、保存性は低い。棺や卒塔婆など葬祭具に用いられるほか、建具・器具・家具・建築材など各種の用途が知られている。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris*) ブナ科

環孔材で孔細部は1~3列、孔圈外で急激に管径を減じのち漸減しながら放射状に配列する。大導管は管壁は厚く、横断面では円形、小導管は管壁は中庸～厚く、横断面では角張った円形、ともに単独。單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では柵状となる。放射組織は同性、単列、1~20細胞高のものと複合組織よりなる。柔組織は周囲状および隔壁線状。柔細胞はしばしば結晶を含む。年輪界は明瞭。

クヌギ節は、コナラ亜属（落葉ナラ類）の中で、果実（いわゆるドングリ）が2年目に熟するグループで、クヌギ (*Quercus acutissima*) とアベマキ (*Q. variabilis*) の2種がある。クヌギは本州（岩手・山形県以南）・四国・九州に、アベマキは本州（山形・静岡県以西）・四国・九州（北部）に分布するが、中国地方に多い。材の解剖学的特徴のみで両者を区別することはできない。クヌギは樹高15mになる高木で、材は重硬である。古くから薪炭材として利用され、人里近くに萌芽林として造林されることも多く、薪炭材としては開発材中第一の重要材である。このほかに器具・杭材・橋木などの用途が知られる。樹皮・果実はタンニン原料となり、果実は染料・飼料ともなった。アベマキはクヌギによく似た高木で、樹皮のコルク層が発達して厚くなる。材質はクヌギに似るが、さらに重い。用途もクヌギと同様であるが、樹皮が厚いため薪材に

はむかず、炭材としてもクヌギ・コナラより劣るとされる。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus*) ブナ科

環孔材で孔圈部は1～2列、孔圈外で急激に管径を減じのち漸減しながら火炎状に配列する。大道管は管壁は厚く、横断面では円形～楕円形、小道管は管壁は中庸～薄く、横断面では多角形、ともに単独。單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では柵状～網目状となる。放射組織は同性、單列、1～20細胞高のものと複合組織よりなる。柔組織は周囲状および短接線状。柔細胞はしばしば結晶を含む。年輪界は明瞭。

コナラ節は、コナラ亜属（落葉ナラ類）の中で、果実（いわゆるドングリ）が1年目に熟するグループで、モンゴリナラ (*Quercus mongolica*) とその変種ミズナラ (*Q. mongolica* var. *grossoserrata*)、コナラ (*Q. serrata*)、ナラガシワ (*Q. aliena*)、カシワ (*Q. dentata*) といくつかの変・品種を含む。モンゴリナラは北海道・本州（丹波地方以北）に、ミズナラ・カシワは北海道・本州・四国・九州に、ナラガシワは本州（岩手・秋田県以南）・四国・九州に分布する。このうち関東地方平野部で普通に見られるのはコナラである。コナラは樹高20mになる高木で、古くから薪炭材として利用され、植栽されることも多かった。材は重硬で、加工は困難、器具・機械・樽材などの用途が知られ、薪炭材としてはクヌギ (*Q. acutissima*) に次ぐ優良材である。枝葉を緑肥としたり、虫えいを染料とすることもある。

・クリ (*Castanea crenata*) ブナ科

環孔材で孔圈部は1～4列、孔圈外で急激に管径を減じのち漸減しながら火炎状に配列する。大道管は単独、横断面では円形～楕円形、小道管は単独および2～3個が斜（放射）方向に複合、横断面では角張った楕円形～多角形、ともに管壁は薄い。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では柵状～網目状となる。放射組織は同性、單列、1～15細胞高。柔組織は周囲状および短接線状。年輪界は明瞭。

クリは北海道南西部・本州・四国・九州の山野に自生し、また植栽される落葉高木である。材はやや重硬で、強度は大きく、加工はやや困難であるが耐朽性が高い。土木・建築・器具・家具・薪炭材、木材や海苔包装などの用途が知られている。樹皮からはタシニンが採られ、果実は食用となる。各地の遺跡からの出土例の多い樹種の一つである。

・ケンボナシ (*Ilovenia dulcis*) クロウメモドキ科

環孔材で孔圈部は1～3列、孔圈外で急激に管径を減じのち漸減する。大道管は管壁厚は中庸、横断面では楕円形、単独、小道管は管壁は厚く、横断面では円形～楕円形、単独および放射方向に2～3個が複合する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性Ⅲ～Ⅱ型、1～5細胞幅、1～50細胞高。柔組織は周囲状～翼状、散在状およびターミナル状。年輪界はやや明瞭。

ケンボナシは北海道（奥尻島）・本州・四国・九州に自生する落葉高木で、時に植栽される。材の重さ・硬さは中程度で、加工は容易、材質は良好である。このため建築装飾材・家具材とし

て賞用され、器具・楽器・旋作・薪炭材などにも用いられる。また、果時に果序軸上部が肥大し、これは甘味があって食べられる。

- ・イネ科 (Gramineac)

維管束が基本組織の中に散在する不齊中心柱をもつ。試料の中には、タケ亜科に含まれるものもあった。送付された試料には、草本類が塊状になっているものもある。

### 3-2 植物珪酸体分析

試料は、11号住居址より検出された纖維状の炭化物 2 点（試料番号 20・76）である。本試料は、肉眼では、纖維状の炭化が進んだ草本類、特にイネ科草本類の葉部あるいは稈（茎）が細かく分解したように観察される。これを分析したところ、植物珪酸体は全く認められなかった。また、このような纖維状の炭化物を走査型電子顕微鏡で観察したところ、イネ科草本の稈内の不齊中心柱部分の一部が纖維状に残っている場合も認められた。イネ科植物では植物珪酸体が葉部に多く、稈部では表層に認められるものであるとされる。今回の分析結果は、電子顕微鏡観察によって示される部位が纖維の主体と考える傍証と解釈される。したがって、纖維状の炭化物はイネ科植物の稈内部の組織に由来する可能性を考えられる。

### 4 考 察

出土材は、いずれも建築材として各地の遺跡から出土例のある樹種であった。試料は11号住居址から採取されたものが多く、他の遺構出土材は数点ずつ採取されたにすぎない。このため、遺構毎の樹種構成の比較は慎重に行う必要がある。今回の結果からは、次の点が指摘できる（表4）。

1) 建築材と推定される材は、種類数が 6 種類（樹種不明の針葉樹を除く）と限られている。この点から、建築部材として、樹種の選択があった可能性がある。

2) 針葉樹材は10号住居址と11号住居址より出土している。したがって、10号住居址と11号住居址は他の遺構とは異なる用材であった可能性がある。

3) 5号・10号住居址の縄から出土したおそらく燃料材と思われる材は、クリとコナラ節であった。燃料材は周辺の森林より得る可能性が高いと考えられることから、周辺にコナラ・クリの落葉広葉樹林が存在した可能性がある。このような林は、一般に雜木林とよばれ、人々の生活に密着した里山林であり、定期的な伐採により維持される二次林である。これより、当時は既に一部の林について管理が行われていたことも伺われる。

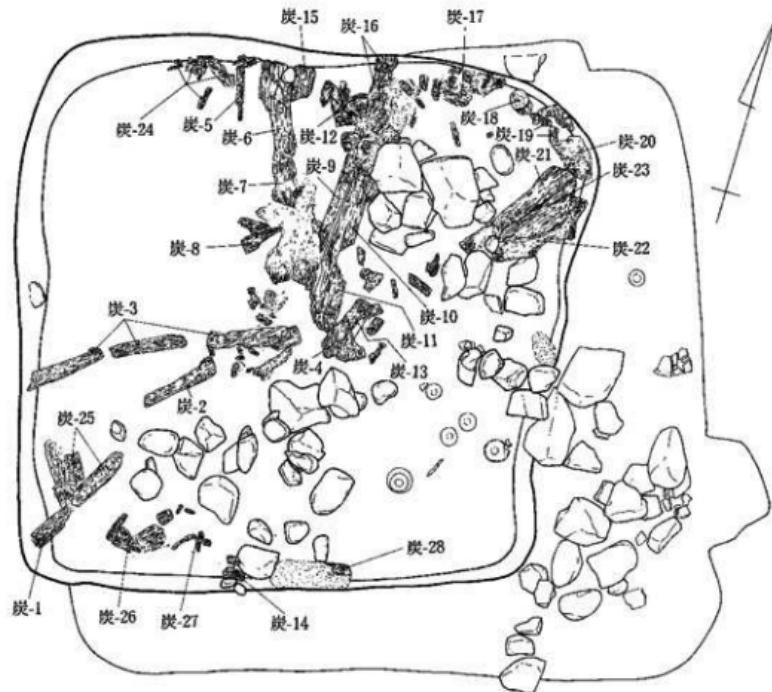
4) 1号・11号住居址では、イネ科の草本類が検出された。試料の中には、タケ亜科に含まれるもの、草本類が塊状になっているものがある。これらから、住居の一部に草本類を多量に使用していたと考えられる。屋根・壁・床などに使用されていたと推測されるが、その出土状況から部位の大まかな推定が可能と思われる。さらに、今回それらのうち 2 点について植物珪酸体分析を実施したもののその種類の特定には至らなかった。しかし、このような試みを重ねることにより

住居址で使用された草本類の種類を特定できれば、今後材以外の植物を材料として利用していた情報が得られよう。

以上、現在得られた結果よりいくつかの推測を挙げたが、前述したように試料が1遺構に片寄り、材以外の情報が少ないため、これらの中にはかなり飛躍した推測も含まれていると言わざるを得ない。植物の住居址への利用状況や周辺の植生を検討するためには、出土状況や周辺地域の既存資料、花粉分析などの自然科学調査、さらに遺構および周辺からの出土材の同定数を増やす、などの今後の研究に期待するところが大きい。

#### 引用文献

- 平井信二（1979～1982）木の事典、第1巻～第17巻、かなえ書房。  
近藤鍊三・佐瀬隆（1986）植物珪酸体分析、その特性と応用、第四紀研究、25、p.31-64。  
佐竹義輔・原 寛・亘理俊次・富成忠夫編（1989）日本の野生植物、木本 I・II、平凡社、  
321、305pp.



第37図 11号住居址出土炭化材試料位置図

表1 11号住居址出土材の樹種（その1）

番号*	遺構	試料番号	樹種名	備考
1	11号住	炭-1	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
2		2a	クリ	
3		b	クリ	フシ部
4		3a	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
5		b	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
6		4a	コナラ属コナラ亜属コナラ節	フシ部
7		b	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
8		5a	モミ属類似種	1年輪
9		b	モミ属	7年輪
10		6a	イネ科	塊状
11		b	イネ科	塊状
12		c	イネ科	塊状
13		d	イネ科	塊状
14		7	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
15		8a	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
16		b	クリ類似種	
17		9a	クリ	
18		b	クリ	
19		10a	クリ	
20		b	イネ科？	塊状
21		11	クリ類似種	
22		12a	クリ	4年輪
23		b	クリ	4年輪
24		c	クリ	4年輪
25		d	イネ科？	
26		13a	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
27		b	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
28		14	クリ	
29		15a	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
30		b	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
31		c	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
32		16a	クリ	
33		b	クリ	
34		c	クリ類似種	
35		17a	クリ類似種	フシ部
36		b	クリ	
37		18a	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
38		b	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
39		c	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
40		19a	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
41		b	コナラ属コナラ亜属コナラ節	

\* 番号は、当社にて便宜上付した。

表2 11号住居址出土材の樹種（その2）

番号*	遺構	試料番号	樹種名	
42	11号住	炭-20a	イネ科	塊状
43		b	イネ科	塊状
44		c	イネ科	塊状
45		d	イネ科	塊状
46		21a	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
47		b	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
48		22a	クリ類似種	泥炭状
49		b	クリ	
50		c	クリ類似種	1年輪
51		23	クリ	
52		24a	クリ類似種	2年輪
53		b	イネ科	
54		25a	針葉樹	保存状態悪い
55		b	針葉樹	保存状態悪い
56		26a	針葉樹	保存状態悪い
57		b	針葉樹	保存状態悪い
58		27a	クリ	2年輪
59		b	クリ	2年輪
60		28	クリ類似種	小片
61	一括	a	マツ属（複維管束亜属）	
62		b	クリ	3年輪
63		c	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	2年輪
64		d	クリ	4年輪
65		e	クリ	
66		f	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
67		g	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	
68		h	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
69		i	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
70		j	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
71		k	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
72		l	クリ	6年輪
73		m	コナラ属コナラ亜属コナラ節	3年輪
74		n	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
75		o	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
76		p	イネ科	
77		q	イネ科	
78		r	イネ科	
79		s	イネ科	
80		t	イネ科	

\* 番号は、当社にて便宜上付した。

表3 1号・5号・8号・10号住居址出土材の樹種

番号*	遺構	試料番号	樹種名	
81	1号住	一括 a	イネ科	
82		b	イネ科	
83		a	ケンボナシ類似種	
84		b	クリ	
85		c	クリ	
86		d	クリ	
87		e	ケンボナシ類似種	
88	5号住	カマド a	クリ	塊状
89		b	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
90		c	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
91		d	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
92	8号住	一括 a	コナラ属コナラ亜属クヌギ節	1年輪
93		b	ケンボナシ	
94	10号住	一括 a	モミ属	
95		b	クリ	
96		c	モミ属	
97		d	モミ属	
98		e	モミ属	
99		カマド内	コナラ属コナラ亜属コナラ節	

\* 番号は、当社にて便宜上付した。

表4 出土材の樹種と遺構

	1号住	5号住	8号住	10号住	11号住	合計
マツ属複維管束亜属					1	1
モミ属				4	2	6
針葉樹（樹種不明）					4	4
クヌギ節			1		5	6
コナラ節		3		1	2 3	2 7
クリ	3	1		1	2 9	3 4
ケンボナシ	2		1			3
イネ科	2				1 6	1 8
合計	6	4	2	6	7 7	9 9

## VIII 結　　び

今回の発掘調査では、縄文時代の堅穴住居址と奈良平安時代の堅穴住居址・掘立柱建物址・土坑などが発見された。出土した遺物は土器・石器・土師器・須恵器・鉄器等で、当時の生活用具が主体となっている。

縄文時代の住居址は1軒だけであり、遺物の出土は僅かであったが前期に位置付けられるものであろう。前期の遺構の発見は当該地域では少なく貴重な調査例であり、当時の社会文化を考えるうえで意味のあるものである。

奈良平安時代の住居址は11軒で、6号住居址は変わった形態を呈しており、時期を含め類例が待たれるところであるが、他は平面形態はほぼ隅円方形を呈し東壁にカマドを構築するものである。出土遺物から8世紀～9世紀代に位置付けられる。住居址がまとまって確認されたことは、当該地域に集落が形成されていたことを物語るものであり、地域の歴史を掘り起こし解明するためにかけがえのない発見であったと言える。また炭化材が多く遺存していた11号住居址は、当時の家屋構造などを理解するために大切な資料を提供してくれている。各住居址から出土した遺物は先に見て来たように土師器・須恵器・鉄器等で、なかでも土器類は数多く採集され当時の生活を知ることができる貴重な資料となっている。とくに8号住居址からは甲斐型壺の出現段階のものが出土しており、土師器と須恵器の良好な一組資料として編年研究に資するものであろう。

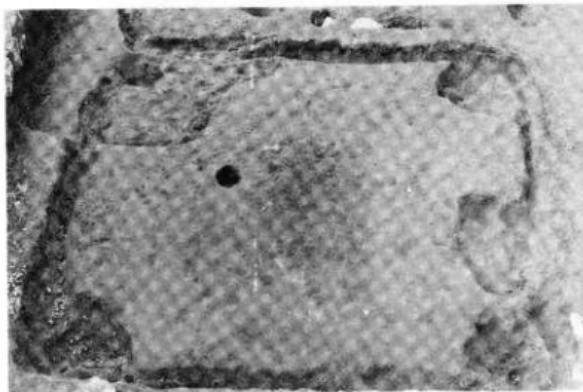
今回の報告は、時間的制約等限られた作業の中でまとめられたものであり、遺構と、名遺構の出土遺物から随意に拾い出した遺物を主体に資料化を行い、掲載・提示したにすぎない。調査の成果と資料の検討・考察がなされず不充分なものであるが、本報告書が今後の調査研究の一助となれば幸である。

# 写 真 図 版

図版 1



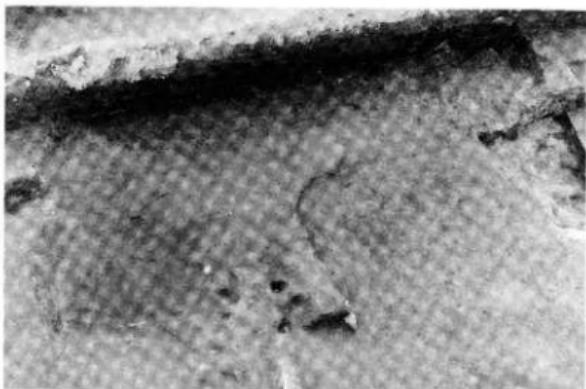
遺跡遠景



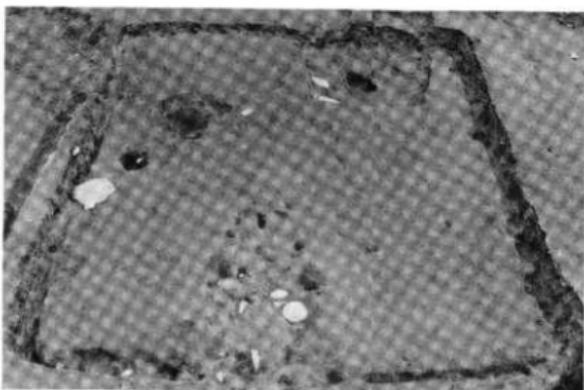
1号住居址



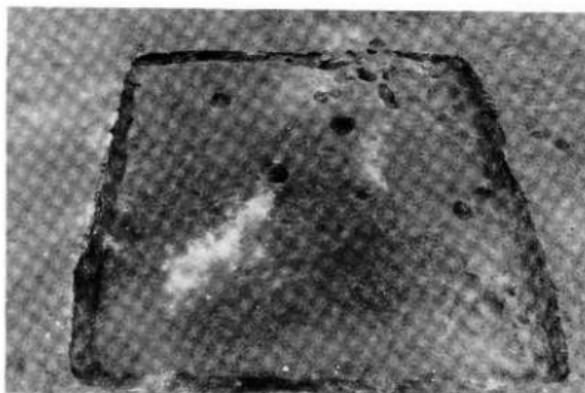
2号住居址



3号住居址



4号住居址



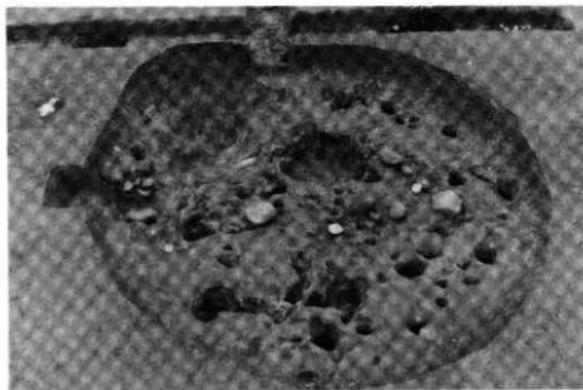
5号住居址



6号住居址



調査風景



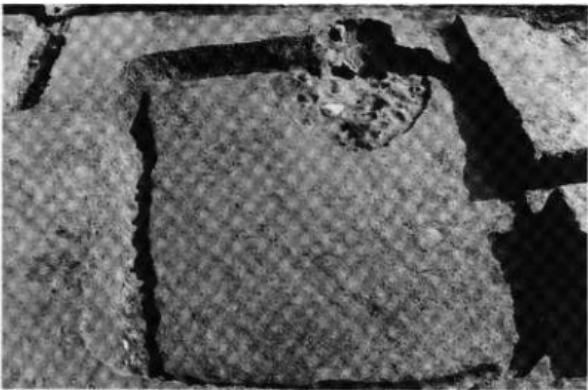
7号住居址



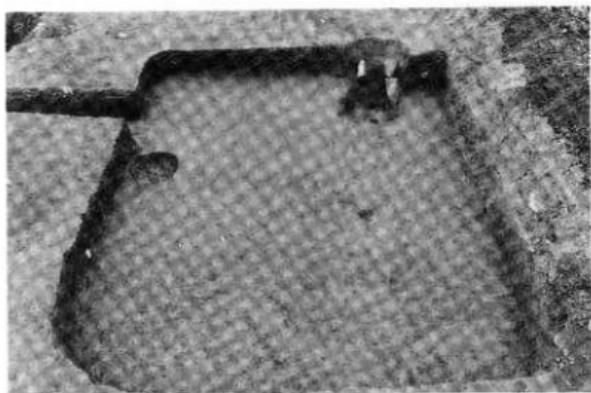
遺跡近景



8号住居址



9号住居址



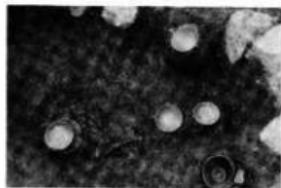
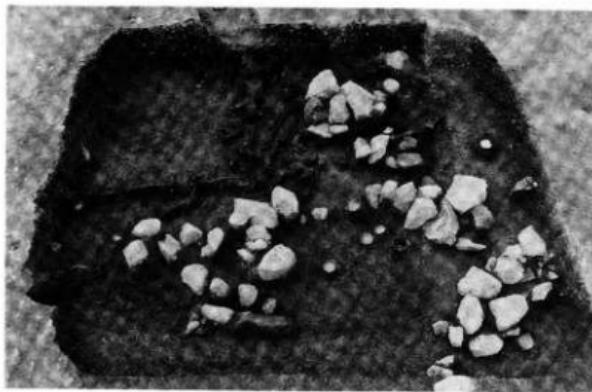
10号住居址



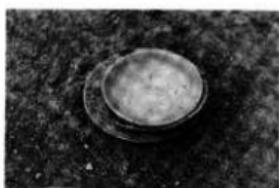
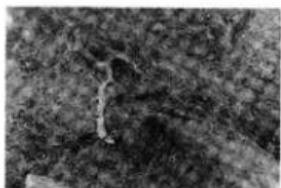
遺跡近景



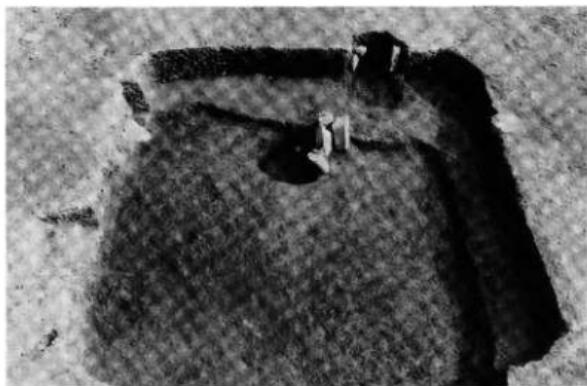
作業風景



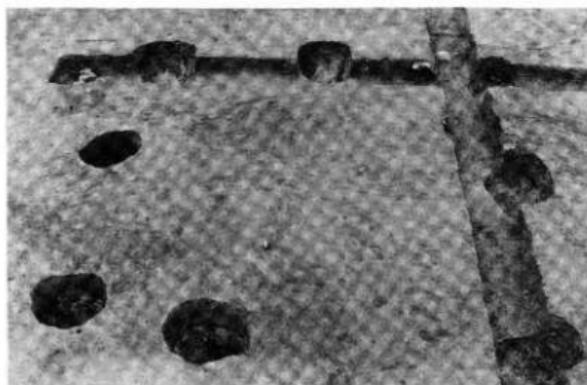
11号住居址遺物出土状態



測量風景



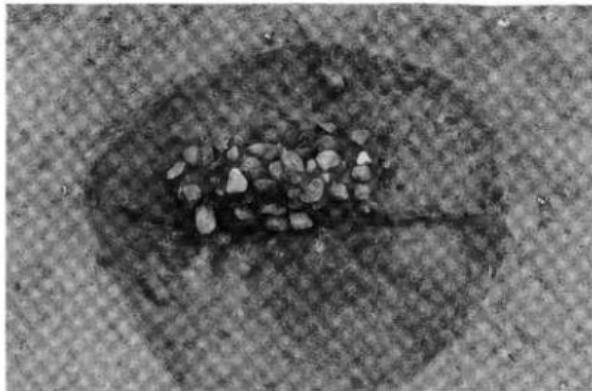
11号住居址  
12号住居址



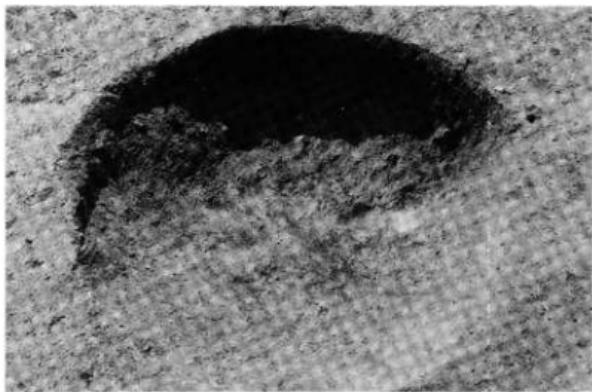
1号掘立柱建物址



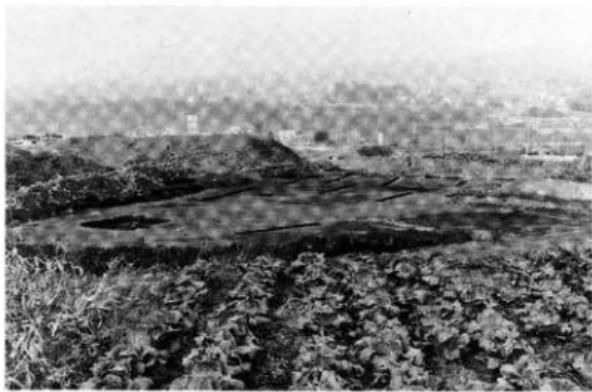
1号土坑



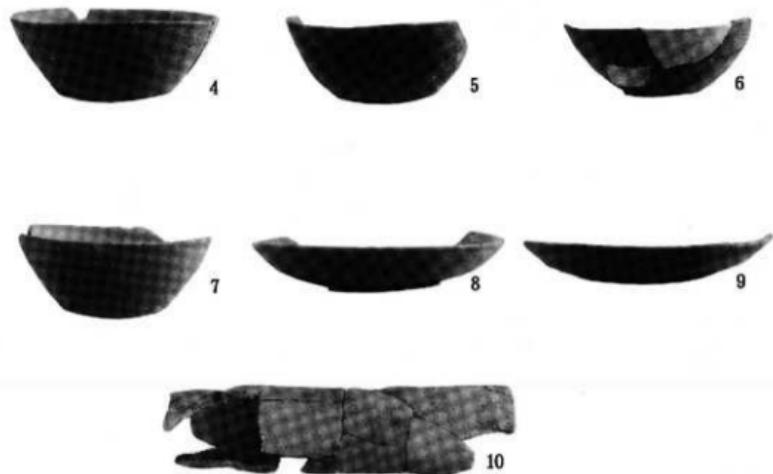
1号集石土坑



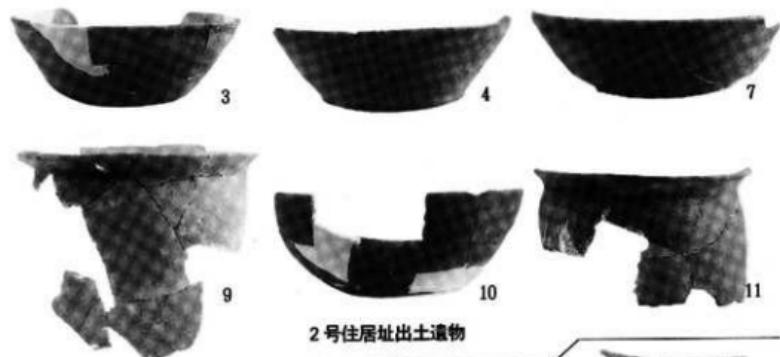
1号集石土坑



遺跡近景



1号住居址出土遺物



2号住居址出土遺物



3号住居址出土遺物



4号住居址出土遺物



1

4

5号住居址出土遗物



3

4

5

6

7

8



9

10

11

12

13

14

15



16

17

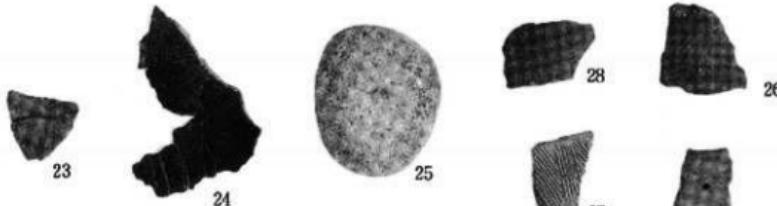
18

19

20

21

22



23



24



25



26



27



28

7号住居址出土遗物



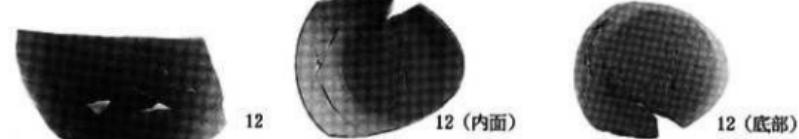
1

4

11

27

31

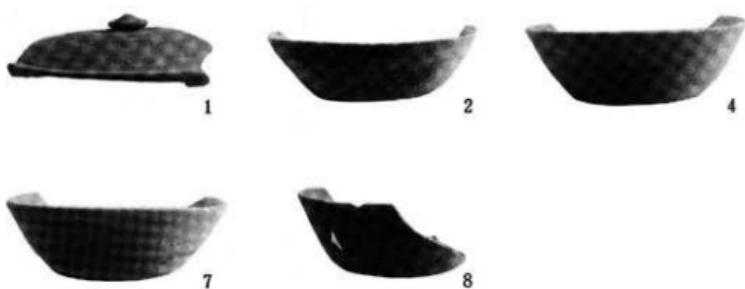


12

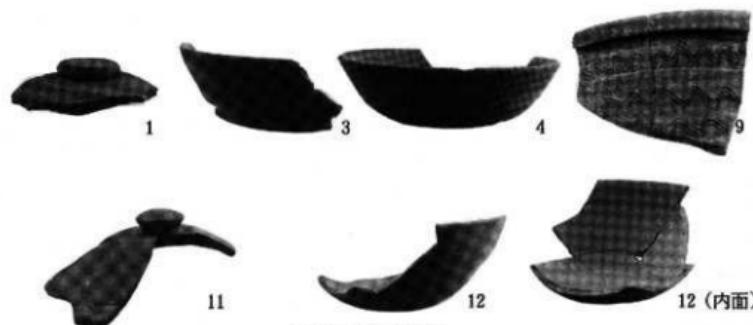
12 (内面)

12 (底部)

8号住居址出土遗物



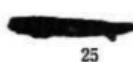
9号住居址出土遺物



10号住居址出土遺物



11号住居址出土遺物



24

11号住居址出土遺物



12号住居址出土遺物

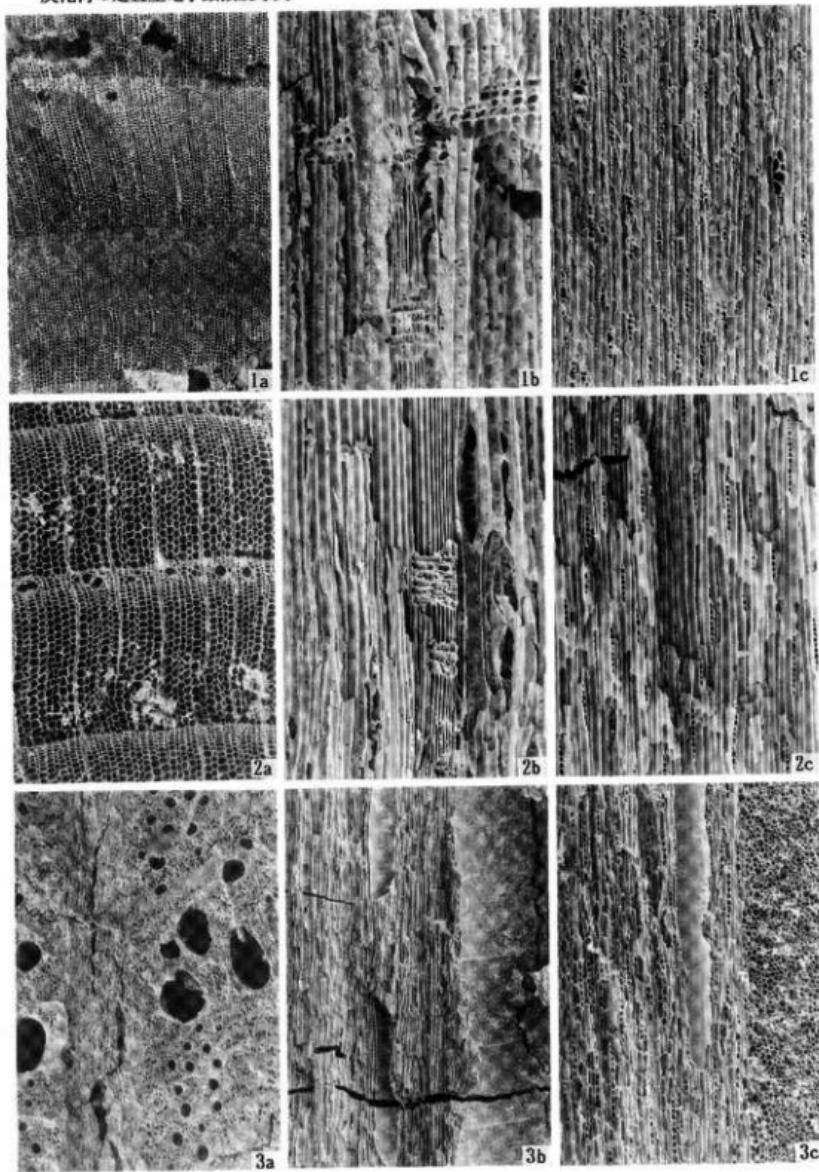


1号土坑出土遺物



遺構外出土遺物

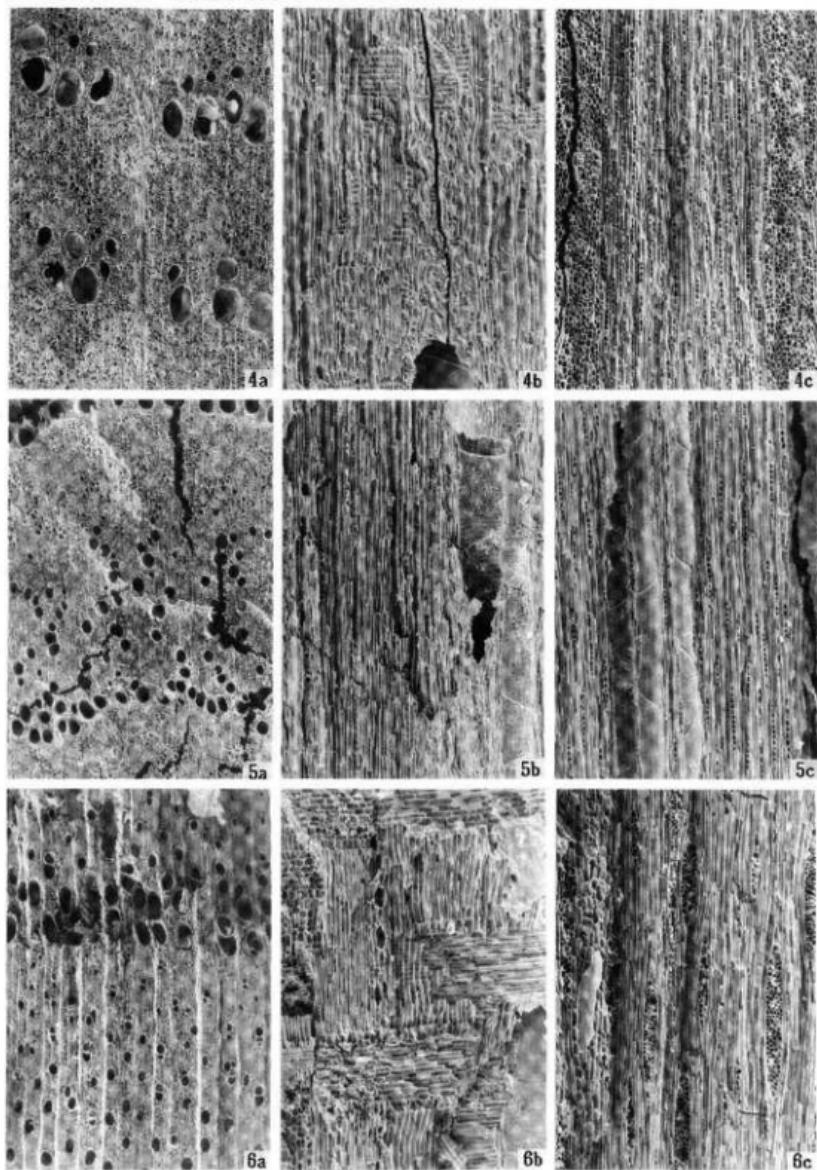
## 炭化材の走査型電子顕微鏡写真

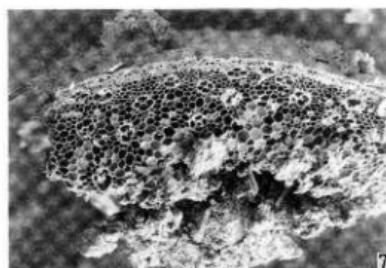


1. マツ属複維管束亞属 (No.61) a (木口)  $\times 35$ , b (柾目)  $\times 105$ , c (板目)  $\times 70$ .

2. モミ属 (No.94) a  $\times 70$ , b  $\times 105$ , c  $\times 70$ .

3. コナラ属コナラ亜属クネギ節 (No.67) a  $\times 35$ , b  $\times 70$ , c  $\times 70$ .

4. コナラ属コナラ亜属コナラ節 (No.29) a $\times$ 35, b $\times$ 70, c $\times$ 70.5. クリ (No.33) a $\times$ 21, b $\times$ 70, c $\times$ 70.6. ケンボナシ (No.93) a $\times$ 21, b $\times$ 70, c $\times$ 70.



7. イネ科の一種 (No.82) 横断面×35.

---

## 上 本 田 遺 跡

発行日 平成4年3月31日

発 行 埼崎市教育委員会  
〒407 山梨県埼崎市水神一丁目3-1  
TEL 0551-22-1111㈹

印 刷 アートプリント社

---

